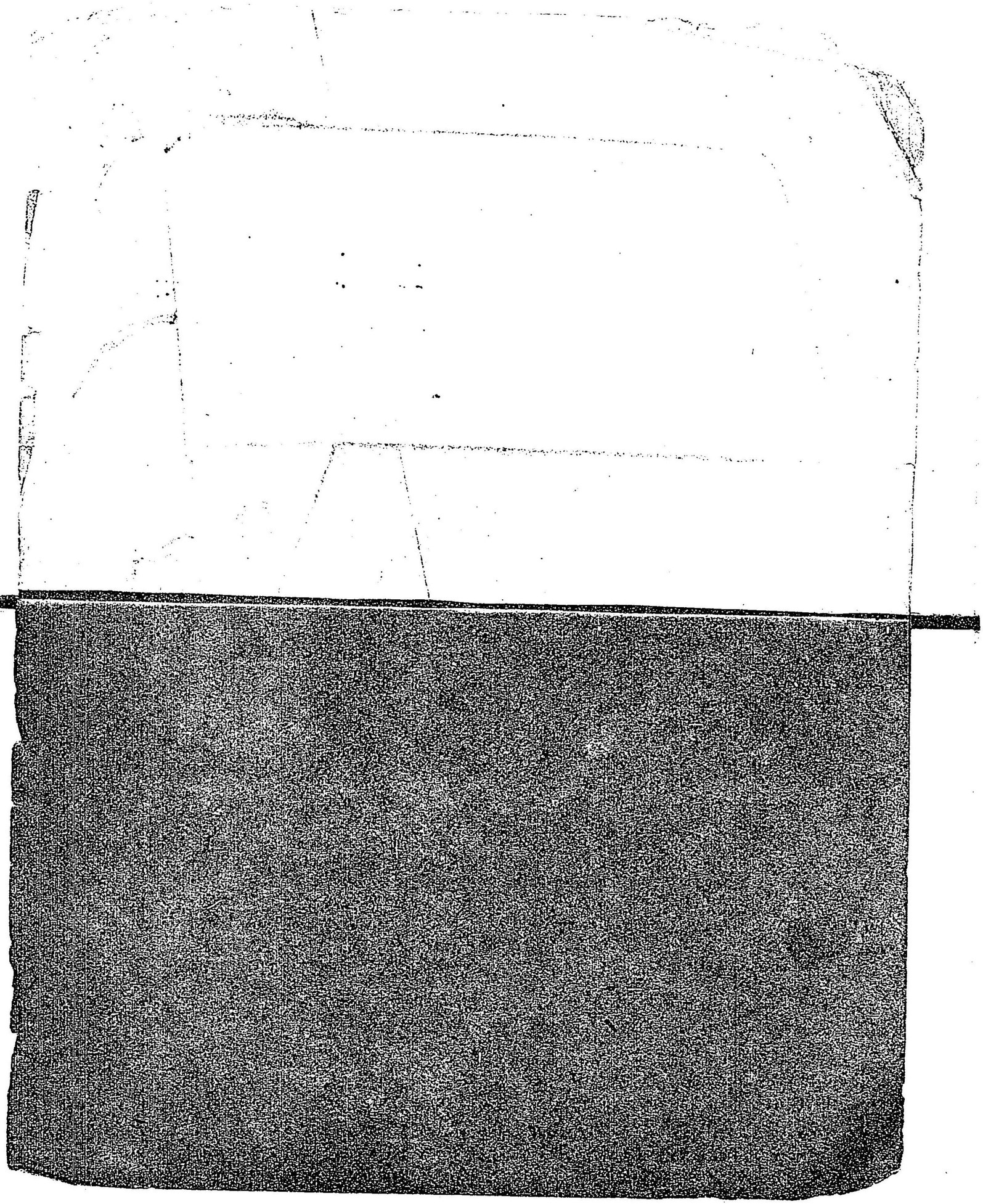
223
2

一樂齋 一冊

當世

東京 盛林堂藏

洒落齋



特64
277

ほしがき

遠からんものは音にも聞け、近くばよつて眼にも見よ、たつ附け袴の廣告も感心せず、諸君と一聲、卓を叩いて切口上では角がたち、丸い玉子も切りよで四角、何をもいふから買場へと、遁口上では覗がきかず、容色がよくて、おとなしやかで、縫裁が上手で、孝行でと、並べ立てゝは媒妁人めき、さりとて柳腰の小手招き、ちよいと好男子とばかりでは、御婦人方が不

承知なり、こいふて文凝つては何ともいひやうなし、
はて何うしたものこ、筆を投げて、腕を組むを木の頭
に、此のページおつひらく。

寅の三月花の頃

蘆山識

當世樂屋雀　目次

○演劇界

演劇のはじまり……一
踊と淨瑠璃……二
俳優と振事の關係……五
俳優とふりつけ……五
名題俳優……七
宗之助の阿古屋……九
俳優の給金……十一
與役の權謀……十四
俳優のあだなと其原因……十六

團十郎、菊五郎、芝翫、壽美蔵、八百蔵、其他大勢
樂屋の拘子定規……二十
蹴込のはじめ……二十一
名優と大道具……二十二
樂屋通言……二十五
芝居茶屋の内幕……二十六
劇場の鳴物……三十二
狂言作者とお囃子……三十四
杵屋六左衛門
名優の俳號……四十一
男地獄……四十三
芝居と書畫……四十四

似顔繪、俳優好み
○俳優しなさだめ
市川團十郎……四十六
贅澤三味、政岡の贅、十八番の贅、化粧の名人、意氣込、その洒落
子弟を憐む、女房お政の勢力、
尾上菊五郎……六十
愛嬌と氣骨、神經家、長雪隱さいけれゐ〳〵、若て益々壯なり、
女房お里、背抜の丸呑、化粧の念入、お岩の祟り、
中村芝翫……六十九
その素顔、女贅、
市川左團次……七十二
抜目がない
市川權十郎……七十三

江戸兒肌、御番匠の悴、初舞臺、豐島屋の相續、改名と富財、
澤村訥子……人氣もの……七十七
中村時藏……好い氣風……七十八
市川八百藏……馬車將軍、夫婦喧嘩、……七十九
尾上松助……經濟主義、大阪生れ、弟子入の始め、舞臺で糞、師の温習に出る、名優となるの兆、音羽屋の弟子となる、先の女房、船頭と間違らる、乘込の閉口、弟子を持たぬ原因、……八十二
澤村訥升……氣焰萬丈……九十三
片岡市藏……其人物……九十四
市川染五郎……當世男、感心な志……九十五

市川猿藏……質屋が宜い……九十七
市川米藏……好一對……九十八
市川猿之助……女房天下……九十八
尾上榮三郎……前途多望……九十九
澤村源之助……本業外の商賣……百〇一
市村家橘……無上の光榮……百〇一
中村勘五郎……未だ老ぬ……百〇二
尾上菊三郎……惜いもの……百〇三
尾上菊四郎……あんなもの……百〇三
市川團藏……潔癖がきづ……百〇四
……素性と幼時の惡戯

○女俳優の内幕

女優と情夫……百〇七
市川九女八の來歴談……百〇八
女優樂屋の醜態……百十二
女俳優一と口評……百十三
澤村紀久八、千歳米波、尾上梅代、鯉丼、綿糸、
米花、若八と崎升、
○新俳優の現況
壯士俳優の給金……百十七
新演劇作者の報酬……百十八
首藤定憲と新演劇……百十八
初舞臺の狂言、抑からの棚却、
伊井蓉峰と劇道……百二十一

新俳優十人十色……百二十三
河合武雄、嵯峨清、水野好美、金泉丑太郎、
藤澤、淺次郎、中野信近、川上音次郎、
○義太夫界
義太夫の起源……百二十六
江戸に於ける義太夫の沿革……百二十九
寄席のはじめ……百三十
天保の禁止と改革……百三十一
名人の名言……百三十三
綾瀬太夫の直話
○義太夫短評
竹本大隅太夫、仝播磨太夫、仝相生太夫、仝阿蘇

太夫、仝時太夫、仝伊達太夫、仝菅太夫、仝峰太夫、仝織榮太夫、仝和佐太夫、

○娘義太夫

流行の絶頂……百四十二
娘義太夫と堂摺連……百四十三
素顔と高座……百四十九
娘義太夫寸評、附其絃……百五十八
素雪、團昇、吉春、團光、素行、三吉、綾太郎、
住之助、京子、小政、新千歳、大吉、若之助、小
豐後、友之助と越子、小清、愛子、廣竹、素秋、
昇之助、東猿、組幸、梅登、網辰、三子、住助、
峰子、梅路、綾重、

○講談師

松林伯圓……木挽町の大先生……百七十六
邑井一……嗜好と呼吸……百七十七
神田伯山……一と皆二回の味噌……百七十八
松林伯痴と名圓……百九十二
　景物附き戦爭の講談
小金井芦州の法螺……百八十一
　愛嬌の自稱天狗
講談師笑話……百八十三
　伯鶴、馬琴、桃林、貞吉、

○落語界

落語家の給金……百八十五

落語家の樂屋內、附幼四郎……百八十六
柳亭燕路……ほんとの眞打……百八十七
三遊亭圓遊……五段目の大津繪……百八十八
雷門助六……感心なもの……百九十
柳家小さん……人氣もの……百九十二
落語家月旦……百九十三
市馬、圓花と小圓喬、蝶花樓馬樂、花圓遊、桂才賀、柳亭左樂、金原亭馬生、柳家つばめ、小燕枝、小柳枝、桂大和、朝寢坊むらく、芝樂、圓兵衛、

當世樂屋雀目次終

當世樂屋雀

演劇界

演劇の權輿

ろの昔出雲の伎女お國といふものが、四條河原にお國歌舞伎といふものを創め、玆に演劇の根を据てから以來三百有餘年の今日に至るまでには、梨園にも何程の變遷があつたか、又何いふ改革があつたかと擧げだしたならば、隨分長いもので、却々入くんだ事歴もあるが近くは名人小團次が出て、從來の金ピカ物に代ゆるに世話ものを以てし、それより我梨園界は日進月歩の勢を以て愈々盛大の域に趣

増永徂春著

いた、明治今日の劇界、そが表裏の實況を觀察して、之を世人に紹介するも強ち無益のことでもあるまいと信ずる、そこで先づ演劇に伴ふ總ての話より始め、次は名優各自に就て述べやうといふ考だ、而し余は梨園界のみの小天他に滿足せで、手にせし筆はいつしか走り、之に亞ぐに義太夫、講談、落語等の方面迄書立てる譯に至つたのである、されば卷中演藝社界の實況の如何である乎は、乞ふ讀んで其味を賞し給へと、聊か茲に演劇の權輿と共に、已の意を一言し置きさて、之から一々其内秘を指摘して以て頂門の一針となし、斯道の發達、讀者が粹の一助たらしめんとするの微志である。

踊と淨瑠璃

不規であつて幼稚なる我演藝界の事物をば、科學的に解説しやうとすると、昔から言ひ來つた名稱だけでは殆んど其解説を爲し得られんものがある、世人の多くは振事の總稱を踊といひ、流議物の總稱を淨瑠璃といふけれども皆以て適切なる總稱とするに難い、そこで此踊の事をば總稱して振事と假定すると、振事には三つの區別がある。即ち舞、振事、踊といふのである。又流議物の總稱を淨瑠璃と呼ぶと假定すれば、此淨瑠璃が二つに區別が出來る、所作事、狂言淨瑠璃是である。

舞　舞は歌の意味を整然と形にのみ顯はす詞なき物であつて、能其他のものから採つたものをばいふ、そこで此舞は長唄物に多くして常磐津、清元等には少ない、

振事　振事は歌の意味精神を仕草に又は形容の上に細密に寫し出し、稍劇に近き方で或は詞入の物をいふ、振は所作事の中又は狂言

淨瑠璃に多い、

踊　踊といふものは至つて無意味のもので、只手足等を輕く動かす物をいふ、今此三つの例を擧げて說明すれば、道成寺の「嬉しやさらば舞はんとて」の所が即ち舞で、「言はず、語らず我思ひ、亂れし髮のみだるゝも、つれなきは只うつり氣な、どうしても男御は惡性もの」等の所が振である、又六歌仙の內で文屋は振が多くあつて喜撰には踊が多い、かつぱれ、甚句等は皆純然たる踊で振といふものは絕てない、

所作事　所作事は長唄の下方物であつて、道成寺、班女、素袍落等をばいふのだ、

狂言淨瑠璃　狂言淨瑠璃は、常磐津、淸元の地によるものであつて、左甚五郎、身代りお俊、道行、宗淸、關の戶等である。

俳優と振事の關係

俳優の素養中最も必要とする處のものは此振事である、此素養が無かつたならば恐らくは女形などには紛せなからふ、尋常一般の動作には、不醇化の異性を掩蔽し得られるけれども、少し劇しい仕草になると、忽ち其本性を掩ふに暇なく、遂に態度が亂れて來て裾が捌けず、從つて音聲さへも男の本性を暴露して了はなければならん、今の菊五郎の如きは此振事の妙を得ないから、上手は上手でも死んだ芝翫や、今の團十郎なんぞの樣に變通する事が出來ないのである故に此振事は俳優に取つては實に重きを置くべき事で、其素養が充分であつたならば、世に名優たるの光榮を博することが出來るであらふ。

俳優と振附

如何に文句が好く出來て居つても此振附が適切して居らんければ、到底見榮ある演藝を作る事は難い、尙二三の例を擧げて之を說明すれば、素袍落しの那須與市の物語の如き、「鏑は海へ扇は天へ舞ひ揚り、」の所なんぞは言文其儘であるを以て、歌曲の文句としては餘り乾燥であつて固苦しいもんであるから、其節附人の杵屋正次郎も、振附人の藤間勘左工門も殆んど困り果てた樣子であつたが、團十郎からは思ひ切つて和らかとの注文なれば、杵屋正次郎の英斷、和らかなる節と言はふより、寧ろ巫山戲た節を附けたので、勘右工門の振も亦隨つて和らかに附く事が出來さしもに乾燥無意味の文句も、杵屋藤間の伎倆によつて醇化され、それに加ふるに素養豐富なる團十郎に依て場に上つた故に、遂に江湖の大采喝を博するに至つたのである、又道成寺の「鐘に恨みは數々お座る、初夜の鐘を打つとき

は諸行無情と響くなり、後夜の鐘を突く時は、絶生滅法と響くなり」の件等容易に振を以て顯し難いから、全く逃けて白拍子の形を見せるなんぞ、又淺妻の「そも鞨胡の始まりは、唐の明公愛で給ひ」の所は固く、「そりや言はいでも澄うぞへ、澄まぬに口說の言ひ掛かり、背中合せの床の山」にて、一轉碎けて輕くなるが如き、嫗山婆の山巡の振事が、むつかしい割合に苦すみて引立ない如き、皆此振事が高妙至難の業であるのがしれるであらふ、

名題俳優

俳優も名題となれば一切の待遇が違ふのである、部屋（即ち樂屋に於ける化粧室）も一人一室か、或は二人で一室で、それに男衆といふものを一人づゝ遣ふ、此男衆といふのも座方から給金を負擔する

ので、中には少なからぬ身上(給金の事)を取つて居る者がある、名題でも上の方のもの、男衆は百圓或は百二十圓(一興行で)の高給を取つて居る、

往昔は一芝居名題俳優は五六人に止まつたもので、又由緒ある家柄は格別、並大体の腕では到底も名題になる事なんぞは出來なかつたものである、故仲藏が名題に成つたのは四十六歳の時で、それですら辞退をした私も五十に近い年をして善惡を彼此言はれるも氣が利きません」といつたが、表方即ち仕切場の清水屋源七が「卿は夫で宜しからふが、跡から上つて來る連中が迷惑だ、俳優になつた冥加には茶屋の暖簾や提灯に紋の出るやうに成なせる」「夫だから猶の事、下されでもした日には恥の恥ですから」と再三辞退をしたが源七に種々と説勸められたので、氣味わるがつて名題に昇つた、是

に反して當節の名題昇進の無雜作なる、師匠から表方へ一回交渉すればそれで直に成れる、但し金が多少は要るけれども是だから名題俳優が一雨毎に殖えて了つて益々其價値が墜る許りだ、近くば澤村宗之助なんぞの如き、新聞では大分に賛めたやうであつたが、餘り早すぎる感がする、

宗之助の阿古屋

先頃中央新聞社に於て擧行された、俳優投票にて少年俳優第二等の高點を得、芽出度大丸呉服店より製造の引幕を受領するの榮を負ひ市村座の去る十月狂言に於て、芝翫の後盾に依て名題に昇進したる澤村宗之助が披露の出し物、檀浦兜軍記の遊阿君古屋は如何であつたか、本年取つて十六歳の宗之助は、充分立派に此大役を見ん事演じ遂げて、場に滿ちたる幾千の觀客を驚喜せしめた、元來琴責の脚

色は、義太夫を聞ても解る通り、何人が演じても同じ樣で、床の淨瑠璃「簾を揭げて引出す」……と叫ぶ時宗之助の遊君阿古屋は始めて花道に差蒐り、觀客は一齊に拍子を以て此可憐なる古遊君を舞臺に迎へた、

宗之助如何に少年俳優中の麒麟兒を以て目せらるゝ者とは言へ、幾千の觀客に對して此大舞臺に立ち、三曲といふ難かしい技藝の外、然も其對手へ廻る重忠は、當時日本一の女形、加己演ずる阿古屋の役は、芝翫の最も得意とする處、此間に立つて已が名題昇進の手並を見せる彼が心事は、果して如何であつた乎初めより終り迄、唯々驚嘆感歎に觀客を一呑にしたる宗之助の巧妙にして優雅なる態度は、確に人を動かす程の價値がある、首尾よく此大役を成遂げたるを見るものは、皆宗之助が成巧を喜ばないものはあるまい、就中

最も大喜びであつたのは、眼前咫尺の間に此可憐なる阿古屋を瞼つて居つた捧澤六郎……、即ち彼が實父の訥子であつたらう、實に彼が拔群なる演態は唯に是れ許りではない、十一月狂言のおやま人形の如き正に賞するに足りる、宗之助たるもの宜しく名を茲界に秀せしむるを期せよだ、

俳優の給金

世人は一概に當時の俳優の給金が高過ると考られるであらうが、夫は僅にほんの六七名で、其他の多くは昔しから見れば多少は上つて居るが大なる慮隔はない、譬へば天保改革より安政文久の頃迄の間に於て百五十兩の年給を取つた名題俳優が、當時の金高大概千二百圓、一年六回の興行で一と興行が二百圓づゝ取る俳優に相當する、

二百圓は中等名題の給金で、是を昔と比較すると大した相違はないけだ、然し乍ら立物即ち一方の座頭となる俳優に相成ると、昔の倍或は三層倍にも相當する、それで興行の日數が昔の六分弱で衣裳小切がつらが自前で無いから給金は非常に騰つてる、されば物の割合には高過るには違いない、然し是は昔俳優の給金を制限した反響だらうと考へられる、

天保十三年の改革から三芝居割振併に書上といふことが始まつた、是は猿若町三座の太夫元、當番、帳元等が毎年十一月の顔見世興行の前に、年番の茶屋へ寄合をして、三町の名主が立會の上來年一抔の座組の協議をして俳優をあれこれと割振る、是をば割振といつた此法は先づ惣俳優の名をかるたの様な札へ記して、立役、敵役、道

化師、親仁と順次部を分けて一と纒として置き、座頭は年々順次に送り据へてゐれから札を取り、其中に黒札と言ふてからに何處の座でも嫌はれる俳優の札は伏せ居て誰も手を附けない、ゐれからまた三町で引張凧の札もあつた、そこで座組が定まつた處で俳優の名前と給金とを書上げて之を名主へ差出したのである、此頃は座頭の年給五百兩即ち一と興行十三兩と二十匁で、今の金高に直せば六百六十六圓餘だ、處が實際はさうでない、此外に座頭金が一ケ年百兩程と加役料が何程かと其他種々なる收入があつたから、先づ一と芝居千圓乃至千五百兩位の給金に相當した、別けて先代の小團次の如きは裸体二百兩といつて、髮だけ自辨で丁度千六百圓許りの收入であつた、

奥役の權謀

奥役といふのは俳優の掛で仕切場に屬する者である、大概一座に三人乃至五人位は居る、其中に自から階級があつて、當番、平の奥役とかう二ッに分れてる、そこで此奥役は俳優の身上（身上とは俳優の給金の事をいふ）の取次、又は役の納め方、書抜の取次、（但し名題以上の俳優に限り）をする外に興行中の出來事は細大となく此奥役が出て取捌く事になつて居る、譬へば團十郎が怒つたといつては其掛りの奥役が出て宥める、ソレ菊五郎が癇癪を起したと言ふては掛の奥役が往て諌る、斯樣な譯だから奥役は俳優の氣質を知り、而して狂言にも明かで、臨機應變の頓知と才識とがなければならん、何しろ物の道理に依て爭つた日には、無智迂昧な俳優を對手にせん

ければならんのであるから、實に奥役の困難は非常なものである、それに俳優は成る丈け舞臺の上で樂をして餘計な身上を得やうとする、其上に又自分の氣に入つた好い役を仕やうと望み、座方の願は成可く給金を減らして餘計に働かせ、否な役でもさせやうといふ方、針で談を持つて往く、處で其衝に當る奥役たるものは、並大体の掛合事では此奴往かんと見て取ると、種々樣々六韜三略の秘計を盡して色々の狂言を遣り、一枚の舌をば二枚はおろか三枚にも五枚にも遣ひ、宜いやうに操る、故守田勘彌なんぞは此謀が最も上手であつた、先づ成田屋を遣ふのには、彼が古物を愛翫するを奇貨とし、骨董を贈つて役を納め、又音羽屋を遣ふのには役に依て加役料を分けて遣り、愛妾の扶助料に贈る、或は殊更に俳優を態と怒らせて置て否がる役をさせたり、實にどうも嘘の嘘、裏の裏と、有らん限り

の手段を盡した、

要するに奥役の秘術は俳優の弱點を見拔て其に附入るのが御得意である、此奥役は僅か五十錢乃至壹圓位の日給なもので、尤も劇場に依て異るけれども、唯宜い事には俳優の給金の末を多少づゝ貰ふ役德があるから内實は頗る收入の宜い役である、

俳優の綽名と其原因

人誰か綽名なからんやだ、蓋し何れの社會にも、又いづれの道にも必ずや一つの綽名はあるものである、況んや劇道の慣習に於ておやだ、今俳優社會に於て當世名優を以て目せらるゝもの、綽名を記して、聊か好事家の一粲を博す、呵々、

市川團十郎　めだま

尾上菊五郎　鈴ころ

中村芝翫　觀工場

これは丈が何時も高い駒下駄を穿いて樂屋入をする故、出方は之を迷惑がり、草履を以て來て「へイお草履」といへば、「イエ私はこれがいゝのだよ」といふ、重ねて言へば忽ち立腹し「そんなら樂屋入りをしません」とすねる故、一同詮方なく下駄にて通し、則ち板の間を、土足故、いつしか人呼んで觀工場といふ。

市川壽美藏　黑い伯父さん

これは團十郎が曾て那智の文覺を演じた時、花道にて投げられ其投げられ方が氣に入り、それより那智に因みある處へ、色が黑いより、那智黑の伯父さんといふのを、略して單に、曰く、黑い伯父さんと、

市川八百藏　　**今清盛**

これは踵を白布で卷き、銀杏齒の高足駄、袖口の明た結城縞に八反の平ぐけ、それに八丈の長襟をかけた半纏、懷中には半紙を四つ折にして入れ、ろれに馬車の樂屋入、されば又馬車將軍の綽名もある、

澤村源之助　　**甘ゐもんだ**

此丈「甘ゐもんだ」といふのが口癖で、稽古なぞの折に、他の俳優には本筋が解らないで「紀の國屋の親方どうです」と聞くと毎時も「甘ゐもんだ」と答へるので、遂にこれが綽名となつた、

市川染五郎　　**ペーパ、貸本屋、ブック**

此人は勿々學が出來る處から、「トウキヨウ、ヲフ、ジヤパン」、または靴屋と言はずして「シユースショップ」、なんぞといふ處

からしてペーパの綽名がつき、而して非常な藏書家なり、且つ又手車の上には、何時もスキントンの萬國史がある、ろれゆゐ貸本屋又はブックといふ、

中村勘五郎　　**寒竹**

頭の恰好から身体の樣子が醫者にして藪醫毒庵然たる處より斯くはいふ、

澤村訥升　　**テツカム**

これは又訥升に似て勝負事が上手であるより、何時とはなしに斯くいふ綽名がついたのである、

片岡市藏　　**御信心**

丈は法華宗の大信心者で、暇さへあれば、ドンドコ〳〵と團扇太鼓に日をば送る故だ、

市川團三郎

これも市藏と等しく大の法華固の處へ以て行て、日蓮宗の講元ゆゑに斯くはいふのだ、

市川猿之助　素盞雄尊

これは妻君が以前何かを一呑みにする處より大蛇と云はれたのを退治したからとて附けられたのだ、

まだ〳〵此外に澤山あるが先づ此位の處にして置かう、

樂屋の杓子定規

往昔は樂屋に種々な規定があつて勿々喧しかつたか、當時は大に亂れて了つた、然し今日に殘つて居るのは、上草履の制規で、樂屋では出勤の俳優、作者、囃方、竹本、頭取、表方の外は上草履を禁じてある、そこで俳優の男衆は上草履の向ふ鼻緒に黑い裂をくつ附けて穿て居る、是はその上草履ではない上履で御座いますといふ申譯だ、是等が即ち今に殘つてる規定の一つである、

蹴込のはじめ

昔の蹴込は只陰を描いたもので、今日の樣な蹴込はなかつたのである、それを明治二年十月、中村座で「相馬祭音歳久月」と題する狂言にて、菊五郎の善知鳥安方が、古御所の蹴込に足を踏掛けて割腹する時始めて實物同樣の蹴込を用いたのであるのだ、因に記す、常足に用ゆる物は、壹尺四寸高にして、中足は貳尺壹寸、高足は二尺八寸、最高二重四尺であつた、これに昔の椽は凡て一尺四寸幅であつて、今の歌舞伎座で飾る六尺の廣椽の如きは例なき大道具である、

名優と大道具

團十郎や左團次は「素人の俳優にして漫りに大道具に容喙をするは宜しくない」と、大概は大道具方に依頼して了ふを常とする、但し團十郎は狂言の種類に依つては時代に摸ふ事もあるが、單り菊五郎になると全然別もので、元來凝性の上に祖父梅壽に倣てにや、仕掛物は勿論、凡ての大道具に至るまで、注文百出尚饜かずといふ有樣だ、それ故に其衣裳假髪若くは俳優、相方等を問はず殆んど愚痴を溢さないものは無い、されど大道具方には長谷川勘兵衛が控へて居つて、歡んで云を迎へ、時に或は損得を顧ないで意匠を凝らす故菊五郎に於ける狂言の瀟洒たる大道具と、團十郎に於ける時代狂言の高雅なる大道具と、共に併行して近來非常なる進歩をなした、こ

は即ち團十郎や菊五郎なんぞの名優も勘兵衛の如き高手とが相適合して以て進ませたので、其關係は恰も昔時小團次と默阿彌との狂言關係に於ける如くである、然し乍ら演劇の大道具は迅速粗雜にして單に外見の美なるをのみ尚ぶ故に、其趣向の種を擧げて見ると實に馬鹿〳〵しきと思ふものが亦少なく無い、

大道具方の類別　大道具方に二種ある、一を製造方とし、一を飾附方とする、製造方は或一座の大道具を製作し終れば、去つて又他の座へ行く、然るに飾附方は其仕上げたものを日々飾附するものであるからさほど難かしくもない、中には道樂半分に爲つて居るものもあるさうだ、

附打　附打は矢張り大道具方に於てする、然し義太夫合方、又は拍子方は共に稽古の中に加へるけれども、單り附打のみは初日から

打附けにする故に、見得、立廻り、又は出のバタ〳〵等の如き、皆此附打の見込に依て遣るもので、豫め打合せをするものでない故に、時によると甚しい失策をする事がある、

嘗て市村座で團十郎が八重垣紋三を演じた事があつたが、丁度紋三内の場で團十郎が紋三を演じて居ると、三八といふものが誤てお化の出るべき「すつぽん」(穴)に陥入つた、處が刀が閊へて落ちもせず、又上る事も出來ず、驚き慌てゝ頻りに藻掻くと、亥の吉といふ附打が其誤つて落ちたのを知らないで、是も仕草の内であらふと心得、かたり〳〵と一生懸命に附けを打つたので、其失策をして一層仰山にさせた事がある、

お化の考案　明治十六年の五月市村座に於て、初めて新皿屋敷を出したとき、長谷川勘兵衛はお化に附て其仕掛に種々と意匠を凝らしたが、どうしても好い考が出なかつた、處が或る日の事自分の稚い倅が艶消しの硝子障子の外へ來て「お父さんお錢を呉れな、よ、よ、お錢お呉れよ」、と硝子に顔を押付けて、頻りに錢をねだり居つた、其時に勘兵衛は何の氣なしに、倅の方を見ると、硝子に顔が接近する時は明に其顔が映るも、少し離れるも忽ち滅して見えなくなつて了ふ、勘兵衛之を見て豁然として膝を打ち、遂に艶消の硝子を應用し、觀客をして殆んど奇怪の念に堪えん程のお蔦のお化を成巧させた、

樂屋通言

悠長して居る事を、寺島。腹を立てゝ、爭ふのを、押取刀でといひ。

單身で出掛るを、獨吟。大騒ぎをテンテレツク。地金を顯はすこと。

を淺黄頭巾を脱ぐ。天井を渡り拍子。逃亡するをドロンじる。意見を述べるを本讀する。不出來しを悪落。堅くるしいのを堀越。等はありふれた通言ですが、一躰に俳優社界に於ける樂屋の話は殆んど芝居掛りであつて、金ヒカの大道具で結構だ、愁歎場の話にはチョボ入りで何うしたとか、又は引込が附かぬ、さんげ〳〵の大世話場だとか、うれは〳〵書澤山で(言草の多い事)煩いなど、誠に妙な風に日常の話迄が變つて居る、

劇場茶屋の内幕

法外の利益

試に活眠を開いて劇場茶屋の内幕を見給へ、此せち辛き浮世に年が年中贅澤三昧で日を暮して居るではないか、如何にして斯くも贅澤な眞似が出來るかといふに、是れ他なし、客より過分の利益を取るからである、今其實況を素拔いて好事家に示さう、

さて劇場茶屋は何に依てかゝる利益をば得るかといふに、客の祝儀と、飲食物の掠り即ち是である、

△客の祝儀　これは大小の劇場及び客筋によつて異るけれども、歌舞伎座や、明治座の茶屋ではいくら少なくても二圓より下はなく中等五圓から上等客は其上だ、中には一と興行で祝儀ばかり千圓もあつた家もある、りこで客は此祝儀を出した特權として、茶屋の雪隱を借り、序幕の開く迄は茶屋の座敷に待合す丈けの特待を得るのだ、而して雪隱は下肥の利益があるし、又一方は只座布團が幾分かは損じるであらふけれども、此座布團が一枚の損料五十錢以上一圓になるのだから、斯んな割のよい營業はあるまい、

△飲食物　劇場茶屋で客に出す飲食物は、辨當、菓子、鮨、口取、鰻飯、水菓子、酒、氷、なんぞが首なるものである、昔時は普通の食物は茶屋で調理して出したが、今では大概然らず、酒と菓子を除くの外は之を座附の食物屋に仰ぎ、是を客に出して其掠を取るのである、（此食物店は芝居者はせりといふ）此掠は劇居に由て多少の相異はあるけれども先づ左の如き比例だ、今次に其原價と賣價とを並記して、其過分の利益の程を知らせやう、（但し元價はセリから茶屋の入れる價、賣價は茶屋が客に賣る價である）、

○辨當　元價十四錢五厘、賣價二十錢、利益五錢五厘

（但し此元價は普通の辨當であれば、茶屋は客を見て一丁增、二丁增、と價を增して品を好くし、從つて價も二十五錢三十錢と高くするのだ）

○鮨　元價五錢、賣價拾錢、利益五錢

（此元價も盛込みと稱して普通の品が若し鮪の醬油附許り注文すると一人前鮨三個にて元價六錢となる）

○菓子

是は茶屋に於て直接に菓子屋より取寄せて置き、客に出すのが常だ、二つで元價二錢五厘、それを五錢に賣る、若しかセりより取ると、

元價四錢五厘、賣價七錢、利益二錢五厘

右の樣に菓、壽、辨、だけで以て、客一人に付十三錢宛の儲がある然るに茶屋は尙此上三品を合して四十錢を客から取るのだ。以上は並通の客に於ける食物である、少し奢る時は驚く許り貧るのである、

○口取（一人前）	元價十五錢	賣價卅錢	利益十五錢
○鰻飯 仝	仝 廿三錢	仝 卅五錢	仝 十二錢
○氷水 仝	仝二錢五厘	仝 五錢	仝二錢五厘
○水菓子 仝	仝 四錢	仝 七錢	仝 三錢

看來れば小格子の貸座敷と毫も異る處がない、其他茶屋の一大財源ともいふべきのは酒である、此酒は一樽十八圓位から二十二三圓迄を止りとし、一樽を銚子一本二合づゝにて割る時は百七十本だけれども劇場茶屋では之を二百五十本に割り、一本普通の價十六錢である、即ち元價十八圓の酒が四十圓に賣れる勘定だ、何とうまい儲ではないか、そこで一芝居には大凡酒四樽位を使ふといへば、酒だけでも八十八圓の純利がある、平均して一日の利益三圓五十二錢だ、」

△祝儀の利益　飲食物の利益斯の如く大なれども、尙祝儀の收入の大なるに及ばないとは又驚いたもの、そして此祝儀の收入高は凡そ飲食物の利益に二倍するさうだ

以上は繁昌する劇場の座附茶屋に於ての話で、それに引かへ開場毎に失敗をば重ねて、孤城落日の狀態に沈める茶屋の內幕と來たら實にそれは〳〵哀れなものだ、

先づ茶屋で涙の出る程高利の金を借りて開場し、初日の一番太鼓が入つて急に座布團を質受けし、染返しの暖廉日光に中りて歷照と先の紋盡しを顯はす、劇場の賣場よりは場代を早く寄越せと度々の催促、遁口上に窮して客の預り物を大急ぎに近所の質屋に持込み、其場逃れの窮策、それを打出し前に傭人の祝儀を借集めて漸く受出し何喰はぬ顏にて「今日は有がとう」ソレお預り物」と澄して居るものゝ、內幕の苦しさ火の車のやうである、かゝる內幕の劇場茶屋も或

所には現にあるが、御迷惑と存じ其名は擧げないで置く。

劇場の鳴物

劇場に於て用ゐる鳴物は種々あるが、其中の重なる名稱を招介しやう、

打込　一番目の大詰狂言の切に打込む、

大薩摩　だんまりの場、或は大せり出し等に用ゆ、

突掛け　注進の掛付武者、又は見參〳〵と出て來る時なぞに用ゆ、

早笛　荒の場の鳴物なり、

雪卸　雪中の場、或は雪降の場に用ゆ、

本しやぎり　幕明前、或は幕切の毎度に大太鼓入にて打込む囃子

をいふ、

片しやぎり　幕切に俳優が白眼む時に打込む幕ぎなり、

相の山　鼓弓入にして物語の場等に用ゆ、

忍三重　總して殺害の場などに用ゆ、

管絃　時代奥御殿等上品の時に用ゆ、

ぬめり　姫、娘、傾城、女中、などの出る時に用ゆ、

ふせ鐘　土手場、清玄殺等の時に用ゆ、

合方　時代、世話、御家狂言とも總じて俳優の台詞中に用ひ、或は鼓弓、琴等を入れ、愁傷には笛を入る、

三保神樂　曾我對面等の場などに用ゆ、

ざら雨の音に用ゆ、

先づこんな處が重なるものである、

狂言作者

芝居の狂言作者といふものは勿々難しいものである、いつぞや櫻痴居士が齋藤太郎左衛門を三幕書下して團十郎に讀んで聞かせた、此太郎左衛門が太鼓を鳴らして四十八ヶ所の籌を集める事は、出雲が作の大塔宮旭鎧に仕組まれて居る處から、居士は其筋に成らない樣にと考へて、殊更齋藤が愈々太鼓を打たねばならんといふ時に他で打出す、是を聞た、齋藤は斷腸の思をするといふ趣向が眼目で以て書た、處が團十郎は内讀を聞終ると、矢張り齋藤が自分で太鼓を打つことに訂正して貰いたいと言出したので、居士も啞然たる許りであつた、實にどうも作者には斯ふいう事が度々あるから難しい死んだ默阿彌翁が常に言つた詞に「自分も永い間には幾度か作者を

止めやうかと思ひ込んだ事があるか知れません、折角作者が丹精を出して目新らしい樣に書た趣向を、俳優の方で買つて呉れすに、矢張り在來の筋に直したり、骨を折て當込んだ台詞を拔て了つたりされると實に情ない樣であつた」とは、全く事實であつたらう、

お嚏子

樂屋でお◎の敎語を名の上に附ける者は此お嚏子と、狂言作者をお狂言といふ許りだ、元來芝居の嚏方はもと能樂の嚏方で、極めて小祿の扶持人なんぞを賴んで來て貰つたのが抑もの濫觴で、つい先頃迄はお高祖頭巾に一本差の安御家人、若くは旗本の道樂息子が裏口から出入りして居つた程である、夫故に自然嚏方に威權があつて、其名を呼ぶのにもお◎の敎語を附けたもので、縱へ座頭でも嚏子部屋の

前を通る時には挨拶をしたのである、然しそれは今から三十有餘年も前の事で、今日では殆んど俳優の奴隷のやうになつて了つた、黒翠簾の内(囃子方の前にある隔)で彈く三味線の調子は六本で、可なり高い調子だが、それに連れる俳優の台詞だから餘程聲がいる道理である、そこへ行くと團、菊、其他名優の台詞は此調子に合つて居る故、耳に聞ても面白いが、書生俳優の台詞は半間だから可無いのだ、今の舊俳優の中で鳴物を眞に聞く耳を有して居るのは先づ菊五郎が第一だらう、それに就て好い話がある、

先年新富座が少し工面の惡い時に、本釣鐘を質に入れたので、其時入用でも受出す事が出來なかつた、うこで以て市村座の本釣鐘を借りて來て間に合せた事があつた、すると其時出て居つた菊五郎は、舞臺で鐘の音を聞て樂屋へ引込んだが、奥役を呼んで、今遣つて居る本釣は、ありやあ此所の芝居のじやあ、あるめえ」、と言ふたので奥役は「そんなら御覽なせえましたか」と聞くと、菊五郎は「なあに、見やあしねえが、音で分つてる、どうも彼の音じやあ市村座の本釣だと思ふがさうだらう」と圖星を指したので、奥役も是には感服したさうだ、實に舞臺に於ける俳優は、一擧一動皆悉く此鳴物の譜に合して居るべきものであるが、團十郎や菊五郎を除くの他はシックリ合ふものが少ない、うれ故他から觀ても何處やら足らない樣な心持がする、尤も是は重に時代物だ、して見ると音樂に離れた劇は眞の劇では無いかと考られる、

杵屋六左衛門　苦心と妙手

杵屋六左衛門は長唄の三味線が巧妙で、年は未だ寄らんが、藝道の

奥秘を極めて當世日本一の稱がある、さうして同人が如何にして此名手になつたかといふのに就ては實に一と方ならん苦心談がある、今の六左衛門は丁度十三代目に當るもので、幼年の時から藝道の稽古ばかりして居つた、最初の藝名を杵屋吉の丞といひ、九歳の時、父喜音翁の脇三絃で、三田の黒田侯へ召されたが、其時三味線が膝へ乗らないのを、黒田侯が可笑いとお笑ひなすつたといふ、それから十三の時に中村座へ出て、三絃の見習をし爾來一生縣命になつて勤めた、そして明治二十二年の冬、歌舞伎座が出來ると共に、遂に六左衛門の名は高まつたのである、而して此時六左衛門は一と方ならぬ苦心と勵勤とをせられたのである、此時座主であつたのは千葉で、其折各一方に名人として聲望を有して居つた、杵屋正次郎を始め、故人松島正次郎、寶山左衛門なぞいふ連中があつで、是非此歌

舞伎座を受持たうと競爭した、すると座主から六左衛門の親父に受け持つやうにと話しがあつた、そこでいざ人數を集めやうとすると何れも役に立つ藝人は正次郎や、正五郎の手に屬して居つて容易に集まらなかつたが、種々奔走の結果漸く集つたので、總淩となると其時六左衛門の熱心は非常なもので、何をいふにも舞臺をする三味線彈は自身獨り、若し是で失敗したら身を沒して死んで了ふと覺悟し、毎晩人の寢靜まるを待つて深川の不動尊へ參詣をして祈願をこめた、頃は丁度十一月の中旬過ぎ、永代橋を渡る時には、身を切るやうに冷たい風がヒユーヒユーと吹いて其寒さ、辛さ、到底筆紙の盡す處ではない、扨て愈々總淩ひの當日となると、サア大變、イザ初まる間際になつて、附師の福原鶴三郎を始め、望月大七、芳村伊四郎、其他重立つた人が申合せて一人も來ない、其魂膽は杵屋親子に

困らせて、迚も遣り切れないと腹を切らせ、そして其跡へ一同で乘込み、まんまと裏をかく計畫であつたから、六左衛門の殘念さ、非常にて、折角願をかけた不動樣も御利益がないかと、情けないやら口惜しいやらで、親子が途方に暮れて居る處へ、如才のない福原鶴三郎が附（是は狂言に遣ふ鳴物、合方を巨細に書留めたる物で、囃子の六韜三略である）を持つて密々に來て、附けだけ親父に渡して逃げ歸らうとしたのを、親父が引止めて、無理に團十郎の部屋へ連れて行き、是々斯々の譯で御座いますと彼等が魂膽を話すと、成田屋も、夫は不都合だ、歸つては ならんとの一言で、鶴三郎も餘儀なく總淡の席へ出て附けに掛つた、是より先、六左衛門は菊五郎の處へ行て同じく其理を語ると、菊五郎も、忌々しい奴等だ、余等が宜い樣に仕て遣るから、まあ酒でも飲んで居ろと受込んで呉れたので、

どうやら斯ふやら、總淡が初まつた。するとそれを聞た外の連中は頗覆さうと掛つたくせに、追々に淡へ半途から來て、漸く此場も無事に濟んだ、然し此時六左衛門の心はどんなであつたらうか、察するに餘りある次第だ。六左衛門は十九歳で喜三郎と改名し、立三味線となつたのが二十三の時で、團十郎の鏡獅子を彈いた、それから後父の後を承けて十三世六左衛門と改名し、爾來歌舞伎座の囃子の頭役となつて居る、

名優の俳號

現時に於ける名優の俳號を並べてみやう、

市川團十郎　俳名　三外

尾上菊五郎　同　梅幸

市川左團次　同　鏡
中村芝翫　同　梅
市川權十郎　同　鯉
同　八百藏　同　中
片岡市藏　同　我
市川染五郎　同　桃
中村時藏　同　獅
市川猿之助　同　笑
澤村源之助　同　秋
尾上榮三郎　同　梅
市川猿藏　同　鏡
同　舛
同　蒼
同　江
同　車
同　舛
同　泉
同　童
同　樂
同　香
同　朝
同　猿

男地獄

昔日吉原のお半といふ藝妓が、團十郎に思ひ焦がれて人を頼んで言寄ると、團十郎の大眼球で睨み付られ、鹿馬な事をと一言の下に刎ねつけられたはズット以前の事、今では若手俳優や小劇場の俳優は依然たる男地獄だ、藝妓やなんぞが俳優を買つて遊ぶには別に媒介も何も要らないが、偖て良家の娘や、寡婦さん等が遊ぶのには大概茶屋の若い衆が取持ちをするのだ、現に歌舞技座あたりでも幾らもあるさうである、況んや小劇場に於てをやだ、淫風の甚だしさは、茶屋の若い衆は其度毎に懐を温め、其俳優と手の切れる迄は、時候〳〵の着服や家遣には事を缺かん次第である、その俳優を買ふ入費が一回五圓位から二十圓位迄ださうだ、近頃贅視聽では淫賣婦の取

締許りは嚴にするが、少しは此方面の取締もして貰いたいものだ。

芝居と書畫

そら歌舞技座が開く、市村座だ、明治座だと、新狂言の始まる時には、必ず幾種かの新聞は競ふて其筋書を掲げ、繪草紙屋は此時逸早くも杜撰極まる錦繪を店頭に吊し、一枚莫大の價を以て之を商ふ其扮目のなき事といつたら田舍者は正に魂消て驚到する、就中魂消申すは、團十郎が勘進帳を演ずれば其脚本が出版され、文覺を演ずれば文覺實傳なるもの出づ、此分で賣行つた日は、彌次郎兵衛實傳、喜多八實傳、を始めとして遂には種もない演劇に本尊の傳記迄出づるに至るであらふ、さりとは又、妙なものだ。

似顔繪

似顔繪と言ひ乍ら此位似て居ないものはない、先づ眼玉の飛出た、唇の印度人見たやうなのが、團十郎で、細い眼の釣上り、頤が長くつて光かつてるのを菊五郎とし、眉の頭下に向ひて居るのを左團次に擬へる、妙な似顔もあつたもの哉、寫眞ある今日であれば、たとへ似ない迄も工夫したらよさけなものを、さりとは又似ぬものを似顔繪といふ、虎を描て猫にだも見する手腕はなさや、斯道の改良こそ願はしたいものである、

俳優好み

それ成田屋が助六をした、ほら團洲好み、米蝶がけだ、やれ新駒が

揚卷をした、そら新駒好みだと、何んだ彼だと誠に煩しいのは是である、それを苟くも良家の令嬢たちが麗々と頭上に載せ、又それを嬉しがつて居る馬鹿娘もあり、慾しがつて強請る白痴女郎もある實に苦々しい事である、賣れずば商賣にもならないものを、餘り賣れたからと言ふて譽められもせず、嗚呼世は俳優等の爲めに軟化せられたか、

市川團十郎

贊澤三昧

梨園社會での大親玉、先祖が箕裘を承繼で並ぶものなき紅隈の荒事師、十八番の歌舞を後に、舞臺を背負つて立つ大達もの、傲然として ムムツンと澄し込み、人を屈とも思はぬ尊大は殆んど大名的の生活をさせめ、一ケ月に費す處五百金を下らん贊澤三昧、茅が崎の別莊を見た

者は一驚を喫しない連中なく、請願巡査嚴然と番をなし、植木屋二人、漁夫五人、釣竿屋一人は常に邸内の長屋に抱へて置き、宛然たる華族擬ひ、其嬌奢愕くの外ない、築地の自宅は在る時にも、家人をして「殿さま」「奥さま」と尊稱させて居る處は、イヤハヤ沙汰の限である、文字も可なり見える處から理屈の解るやうな顔はして居れども、其實は解らざる事頗しといふ始末、それに拾四五年前迄はろんなに慾張りもしなかつたが、老先の短かくなるのにつけ、いやに慾張根生が增長して世間の否難を蒙つても洒蛙〳〵と澄して居る此頃の内幕では正に四五万の預け金はあるべき筈だ、是に本宅別莊等を價格に積れば彼是拾四五万圓に届く程だといふ、尤も之を世界隨一流の名優たる佛蘭西のサラー、ベルナルド等の家産豊なるのに比較するときは毫も驚くには足らんのだが、昔日は河原乞食と

して下流に立ちし俳優が、つい先頃迄は尾上に抽油を布いて雨漏を防ぎ、新宅開きに近所の洋燈を借集めし境遇を知る者は、其一足飛びに驚き入る。

其眼玉の大いと共に、何んでも大きい物計りが好で、平常食ふ飯の茶椀までも大きいのを撰び、總じて小さい物は氣に合はず、自ら好んで大名風を氣取り弓矢の談は最も耳を傾ける處である、隱し藝は義太夫だが、至つて下手な方で聽される方で迷惑な位、丁度福地櫻痴居士の平家琵琶と好一對である、道樂といふたら唯沖鉤りばかりが相變らず盛んである位なものだ、

政岡の髭

明治十五年の十一月、市村座で千代萩を演じた時、團十郎が初役の

政岡を勤めた、其折團十郎は猿若座とかけ持であつたれば、兩座の間を車で往復し、風呂に這入る暇もなく、直ぐに賴兼をして、政岡の拵へに掛り、顏も剃らずに舞臺へ出た、處が飯焚の場を濟して榮御前が引込んだ後、千松を抱いての愁歎に團十郎の政岡は「千年万年待つたとて」とちよぼの文句に連れ、千松の死顏に自已の顏を押當て、歎くと、千松をして居つた坂東竹松(今の市村家橘)が、既に死んだ譯であるのに忽ち聲を揚げて「伯父さん髭が痛い〳〵」と言ひ出したので、樂屋一同が大笑をした。

市川團十郎

拾八番の暫

團十郎が得意とする歌舞伎十八番の中で、到底も外の俳優に眞似の

出來ぬものといふたら、先づ此「暫」なぞであらふ、近くは去る二十八年以後一二度演じた位で、あまり度〻遣らない、されば世人も「暫」の名を耳にするも其藝を見たる事なきがあらふ、依て今茲に「暫」の一擧一動の形、及び言々句々の台詞の廻し振りを記して、以て其如何に壯麗であるかを介しやう、然し餘りに長くなるの恐れがあれば、其出以前及び他の台詞にして直接之に關聯しないものは省略する、そこで團十郎が二十八年の十一月歌舞伎座で演じた時のを書けば、此時丈が各顧客に贈ッた扇面に記した俳句は左の二つであつた、

紅くまの土人形やかへり花　九世三升

讓られた太刀拭はゞや霜日和　九世三升

そこで「暫」の出以前を略すとして直に出に及ぼさう、先づ、

受けの清原の武衡が、加茂の次郎等の首を肴にとて、女鯰照葉に酌をさせ、腹出し東金太郎「イデ素頭をぶつ放さうか」同じく足柄左衛門「今がせへでだ」腹を出し四人「觀念しろ、ヱ、ヱ」と、此ヱヱに力を入れて言ふ、武衡大盃を擧げて將に酒を飲まんとし、腹出し四人各々刀を拔き掛るとき「暫」の鎌倉權五郎景政は、揚幕の中にて、

「しばァらくー」

と凛然たる、高く强い聲にて之を呼び止める、武衡「まて〳〵〳〵」の台詞以下腹出し其他各々台詞渡り、鯰坊主の鹿島入道「物はためした聞て御覽なさい」、武衡「暫」と聲をかけたるは」腹出し四人「何やつだ、ヱ、ヱ」と詰れば、幕中にて又

「しばァらくー——」

腹出し一同「暫とは」と尙問返せば

「しばらく〳〵しばアらくプウ――」

語尾のくは、殆んど聞ゑぬか位で、プウーと凛然たる聲で、最も高く且つ強く呼び止め、「斯かる所へ鎌倉の權五郎景政」と太摩薩大小人よせになり、團十郎は吉例「暫」の拵へにて、意氣軒昂として揚幕よりヌックと出で來たり、大薩摩「素袍の袖も時を得て今日ぞ昔へかへり花、名に大江戸の顏見世月目覺しかりける次第なり」にて、出づるや否や、直ぐ揚幕の前にて、先づ土間に向ひて見得、更に正面に向ひ、加茂次郎兄弟へ敬禮する意にて袖口を前に合せ、膝を左右に開き、躰を一、二、三と段を取つて前へ屈め、右の足からのそり〳〵と歩み出して花道の中央に止り、大磐石の樣に床凡に掛り、矢張袖口を前に、

折合せ、土間の方へ眞向になる、之を見て各台詞ありて、腹出し四人「何やつだ、エ、ニ」と言へば嚴然として動する色なく、

「淮南子に曰、水餘あつて足らざる時は、天地に取つて萬福に授け、前後する所なしとかや、夫何ぞ公私と左右とを問はん、問はでも知るき源は、露玉川の上水に、からだ計りか膽玉まで、滌ぎ上げたる坂東武士、盛り三升の九代目と、人に呼ばるゝ鎌倉權五郎景政、當年茲に十八番、久し振にて顏見せの、昔を忍ぶ筋隈は、彩色見する寒牡丹、素袍の色の柿染も、澁味は氏の相傳骨法、機に乘じては藁筆に、腕力見する荒仕事、江戸一流の豪宕は、家の技藝を傳覽あれ、とほゝか、ゝ敬てカ、、、クワアー白をーすー」

此長台詞、然も滔々として大河の流るゝが如く、少しも淀む所なし、武衡「今暫くも聲をかけ、つん出た奴を能く見れば、見覺

えのある。角前髪、外に類も荒事の、本家に相違あらざるが、其權五郎景政が、何で暫くと止め立いたした」、と詰る、これより大福帳の問答になる、

「大福帳の額は誰が下した、イヤサ誰が下した」

武衡「シテその大福帳に、いはれがあるか」と問ふに答へて、

「おろかなり、りも大福帳のいはれ、先づ大は萬物のかしら、名なくて外なきを大と讀ませ、一を書き人を加へ、天地乾坤の惣名、これ大なり。」

是から大福帳の長問答があるのだが餘りに長くなるから此邊で筆を措かう、

化粧の名人

團十郎は顔を拵へる事に古今の名人である、流石は日本一の親玉だけあつて、常の「顔をするには水刷毛を上手にさへ遣へばそれで宜しいのです」と語つて居る、されば眉を引くにも女形の外は決して筆を用ひない、大概は指先で書き、至つて存在な作り方ではあるが然も「舞台では二三間前から見て奇麗なら宜いのだ」とは自分の談である、

團十郎の意氣込み

劇に重んずべきは互の氣意込みである、されば故彦三郎と仲藏の如き、氣意相投じて互に寸分の隙もなく、思はずしらず看客も之に見入つて肩の凝るをも忘れ、煙草吹ふ間さへ惜しいと思はせた、而して現今に於ける劇は如何であるが、先づ團十郎と故新藏なんぞは正に意氣相投するといふべきであつた、然るに今や新藏逝て無し、あ

はれ、團十郎が神に入るの妙技を演ずべき對手はなきか、吾人は茲界の爲めに之を哀惜するものである、

團十郎の洒落

團十郎が先年大坂へ下つた時、同地の仁和加師鶏屋團十郎といふのが成田屋の三舛の紋を用ゐて居つたを、門下の連中が認め是は怪しからん次第である、直門の八百藏や、壽美藏でさへ、三舛の中へ名前の一字を入れてるのに、仁和加師なんぞの分際で、只の三舛を用ゐて居るのは不都合だと騒ぎ出したので、それを聞た鶴屋團十郎は爾來三舛の内へ鶴の、一字を入れ、引幕を成田屋へ贈つた、程經て團十郎の弟子の一人が「師匠鶴屋は三舛の中へ鶴の字を入れたから宜いが、今度は中橋の松屋の「もなか」は只の三舛で不都合じやあ、

ありませんか」、と打笑ふと、團十郎も輕く笑つて「ナーニお前、彼あ中に餡があらあナ」

子弟を憐む

團十郎が市村座に出勤して居つた時の事であつたが、或日お湯へ入浴つて居ると、丁度其時同じく樂屋の此湯へ入浴に來たのが、當時門人の今の尾上松助で、師匠が入浴つて居つたから自分は少さくなつて居た、すると團十郎は何う思つたか、松助の脱で居た垢じみた浴衣を、ざぶりと計り湯の中へ浸して行て了つた、さあ驚いたのは松助で、何か師匠が氣に觸つた、事をやつたのだらうと、ビク〳〵したが、先づ差當つて困つたのは只た一枚しか無い浴衣、それをビショ〳〵にされては大部屋へ歸る事が出來ない、ハテナ之は困つたと泣きさうになつたが、仕方がないから其譯を話して裸体の儘で頭

取台の前を通り抜け、大部屋へ駈込むが否や、直に、後見の黒衣を着て塞いで居つた、處へ團十郎の男衆が浴衣地を澤山持つて來て、何れでも氣に入つたのを取れと言つたので、松助も漸々師匠の心が解り、大に嬉しがつた、詰らん事のやうではあるが、勿々一寸興味がある氣風だ、

女房お政の勢力

女尊男卑の論者を連れて來て、團十郎が家庭に於ける女房お政の勢力を見せたならば「善哉〳〵、我等が夢にも覓めて得なかつたものの之を愚蒙なる俳優の家庭に於て見んとは」と言つて驚くであらふ、丈の女房が陰に陽に劇場に對して勢力を持つて居る事は實に驚く許りである、余が斯ふ言ふたら其内幕を知らん者は、なにも俳優の女房が舞臺へ出て躍る譯じやなし、なんで如其に勢力があるのだかと

疑ふであらうが、抑も此お政は舊幕府の長上下御用小倉庄助が娘で理あつて兄の養子に行た先なる隅田村のお庭方龜岡の厄介になつて居つたが、娘盛りの頃より團十郎に頗る足駄を穿いて首つけたといふ惚れ方で、到頭實家を飛出して了ひ、山谷の八百善が親里になつて團十郎と夫婦になつたのだ、其時には漸く數寄屋の衣服が一枚わつた丈だ、それから貧乏世帶の遣操をか弱い女の手一つで切て拔け實子、扶技子といふ二人の娘を擧げてからは、子を以て知る親の恩で散〳〵苦勞を遣りぬいた果が、今は幸にも言ふ目が出る身となつたが、性來何事によらず至つて無頓着の質で、其無頓着が餘りに過ぎて度〳〵失敗を招く事があるのも滑稽の一つである、然し乍ら座方を摶へて身上を祈り出す處の呼吸手かげんは却〳〵豪ものだ、譬へば歌舞伎座で團十郎を雇ふとするには先づ掛りの奥役を遣して、出

勤の諾否を聞合せ、其次に幕數が幾幕で身上が幾許と取極る、（身上とは俳優の給金の事）處で此掛合の衝に當るものは誰であるかといふに、是即ち女房のお政の與る處で、本尊様の成田屋は一向に關しない、そこで身上の押引も附て出勤の約定が極まると、即ち狂言の相談となる、此時は成田屋が出て話をするが、座方の側では作者や金主が評議の上で成るたけ多く出勤させやうとする、又俳優の方ではなるたけ骨折を偷まうとする、さあ此場合には得て衝突が持上る奴だが、毎時も抜からぬ與役は早速女房の方へ廻つて行て、結果は金で以て座方の請求に應ずるやうにするのだ、

尾上菊五郎

愛嬌と氣骨

「モウ可然ェ、人間は五十の坂を越しちやあ往生だ、ヲ、寒い〳〵」と金緑の眠鐘と共に禿た頭を光らせて、艶辞を客待の車夫に迄も振蒔くのは此丈の愛嬌で、菊五郎が其性質の團十郎と全く異る事は恰も其舞台のからりと一變した如くである、誰に逢つても如才なく話を合せて、決して人の氣を外せない處は流石に豪い處だが、其お艶辞が過ぎて後で迷惑を受ける事が度々あるが、然し罪のない男だ、それに物事がなんでも井然としてるが好で、成田屋なんぞの様の大ざつぱの事は大嫌である、座敷なんぞも二十疊三十疊の大廣間より は反つて四疊半の風流然たる茶室好が大の御氣に入りで、頗る茶人的の方だ、

神經家

菊五郎は至つて神經家で、何事によらず、迷ひ易い質であるから兎

角決着が遲い、再三再四熟考に熟考して漸く後で決定する位だ、そして若し人にでも否難される時は復迷ひ出して氣を揉み、成田屋の樣な勇氣は乏しいであるから、新狂言を演ずるのには少なくとも一ケ月位の準備がかゝるのである、それに物事に念を入れる性質で朝夕の起臥迄が矢張變つて居つて、殆んど信じ兼る位だ、朝は大概七時頃(但し冬向は八時頃)寢床を出で直に隱雪に這入る、

長雪隱といけれふ〳〵

此雪隱が非常に長いので、正に一時間半餘りも懸る、それであるから若し至急の用事でも出來ると雪隱の中から話をする、そこで此所を出ると次は齒を磨く、此時が又却て大變なものだ、先づ其有樣を書て見れば、白木綿の腹掛をして鏡臺の前に座る、此處に齒磨入

楊子、和洋合せて十八種程も陳列し、別に合せ鏡を備へてあるのだ處で老爺さん一通り陳列してある位置を眺め、楊子の位置が三分許り離れ過る、氣を附けねへな、此齒磨入は何時もよりか一寸許り左へ寄過ぎてる、ア、可無エ〳〵と、先づ位置を井然として合せ鐘を取上げ、大きな口を開いて最初上齶の齒から磨き初めるのだ、此間が先づ同じく一時間半もかゝる、そこで齒磨が終ると顏を洗ひ、禿げた頭を石鹼で擦り擦り磨き上げる、これが濟むと漸く神棚に向つて拜禮をする、然し夫も一意專心で敬するといふ譯でもない、處で自分の想出した事ばなんでも構はずに言つて了ふ、「オイ可無えせ〳〵彼の檜葉に蜘蛛が巢を張つて居るせ、箒を持つて來て全然綺麗に拂つて置ねゑ、……ア、靜にしろ、それじやあ植木が痛んで可無ゑ、序に三河島の忠太の處へ端書を出して二三日中に來るやうに

言つて置ねゑ」と言附けて拜を上げて居るかと思へば、はや眼は他に轉じている「彼の鉢の木を日當りの好い處へ出して置ねゑ、それに手洗鉢の柄杓が曲つてるせ直して置ねゑ」と吩附けては又拜みを上る、それであるから此拜が相濟むと先づ正午過きになる、故に劇場へ出勤中は大に拜を簡畧にし、正午前に樂屋入をする、さあ斯ふいふ譯であるから劇場の者なんぞは台處に詰掛けて居り、又衣裳屋は衣裳を聞合せ、大道具方は大道具の訂正を問合す、そんな期んなの用を片附て、いざ朝飯の箸を取る頃は最早三時前後になる、されば冬の日が短い時は直に點燈頃となつて了ふ、そして夜の十一時、十二時時分に晝飯と晩飯と兼たいの膳に對い、家人を相手に壹合餘りの酒を傾けながら笑談に時を移し、臥床に入りて寢に就くのは午前二時過、時によると三時頃になることがある、

老て益々壯なり

江戸つ兒膚の此老爺、是で勿々若者も及ばん位な大元氣で、新富町の本宅（女房お里）、龜井橋の妾宅（阿梅といふ是が菊五郎の當時第一の寵愛者）、濱町の妾宅（おぎん）此三軒の間を始終往來して居るが、其中でも龜井橋の方へ泊る事が多く、本宅へ歸る事は滅多にない、尤もそれには大に原因があるが（後に出づ）本年五十八歳の禿頭でさりとは壯なものである、

女房お里の現況

菊五郎の本妻のお里といふのは、青山邊の御家人の娘で、幼少の頃から人に貰はれ、一度は柳橋から藝者となつて現はれた人物で、錢

に菊五郎の妻と成つたのである、今より二十年程も以前の事であつたが、奥役の斧丸と私通して居るといふ悪評が立つたので、町内で知らぬは亭主計なりと、澄し込んでも居られず、菊五郎も大に立腹し離縁沙汰と迄なつたのを、魚河岸の貧闇連が仲裁に入り、段々其事情を探つて見ると、其頃菊五郎と好い仲であつた梅林のお鐵（今の新富座の茶屋）が根もない事を言觸らしたのだと知れ、騒ぎは無事に鎮まつたが、其後といふものは何となく夫婦の間が疎くなつて大晦の晩でなければ菊五郎は本宅へは戻らなかつた、近頃でも本宅へ歸る事は滅多に無い、然し乍ら給金の抽引には毎時もお里が必ず喙を容れる、其上弟子の給金は一括にして女房が受取り、而して其上前を刎る、尤も元が女房の取得となる事は公然の秘密で何れも同様である、

書抜の丸呑

菊五郎は漸く假名が訓める位であつて、書抜（演劇の狂言の台辞を脚本から抜萃したもの）は一字一句皆狂言方から假名を振つて貰ふのだ、それを夜になつて枕に就てから獨で揉るのである、此處が團十郎と大に懸隔がある處で、團十郎は隨分難しい歴史劇でも書抜を咀嚼す程の力があるが、菊五郎と來るとさうでない、此抜書を丸呑にするが故に血にもならんで其儘下つて了ふ、

化粧の念入

菊五郎の化粧といふたら馬鹿に念を入れたもので、先づそのお化粧をして居る光景を書てみやうならば、諸肌脱で鏡台に向ひ、禿頭を

恰も電氣燈のやうにピカつかせて面を塗立て、金縁の眼鏡を二重に懸けて眉を引き青黛をする、（青黛といふは額際の薄青く見るもの）此青黛で大變に暇の取れるのだ、そこで漸つと面が出來ると外の鏡で照らして見る、此鏡許りで三四面は必ず座右に置てある、是で以て一々ためつすかめつ眺めて、最早夫ならば宜しいとお氣に叶つた處で鬘を掛けるのだ、處が夫位に丹精した顔でも折々眉が歪んで居る事がある、察する處丈は至つて手頭が不器用で、自分の意の樣に働かないのだ、と或人が語られたが、何さま然うらしい、夫故に菊五郎が出る幕間が非常に長いのは全く是が爲めなのである、

お岩樣の祟り

往昔から四谷怪談の狂言をすると、不思議に何れもお岩の祟を受けないものハないと言傳へてある、然るに當時ヒユードロ〳〵の方ハは古今獨歩の丈であれば、先年歌舞伎座で以て之を演じた、處が開場の五六日前丁度眼を患ふた、すると世間ではお岩樣の祟であるといふて大に恐れ、菊五郎が技の神に入るを賞すると共に、迷信の結果大に人氣を取り收入が頗る多かつた、げにお化芝居も善持た世の中、大道の賣卜者も喰はれる道理であるわい、

中村芝翫

その素顔

此頃父の名を繼で芝翫となつてより人氣益〻壯になり、十一月狂言に於ける市村座の女暫の景氣といふたら、實に豪いもので座主もホク〳〵大喜であらふ、芝翫はまづ舊俳優中では團十郎を除くの

外一番文字も讀め、文も少々は綴り、書抜くらひは自分一人にて添刪するに差閊へはない、其上小說を讀むのが大の嗜で、樂屋に居のても舞台に出ない間は始終小說を放した事はない、芝翫は頗る高尙がつて居る質故に、餘り女の噂などは好まんやうなれど、內幕に立入つて見れば恐らくは好まん方でもあるまいて、尤も近頃は愛閨お玉の方の待遇一方ならず宜しいと見へ、謹愼して居るだけあつて、一と切のように米倉の娘に大騷ぎせられた程の艶聞もない、本名は山本榮三郎といへば、當人は三郎の二字を畧して山本榮と自ら稱して居る、蓋し團十郎の堀越秀、菊五郎の寺島淸といふ樣な一字名に擬たのだらう、

芝翫の女暫

弘化年間坂東玉かが勤めてより以來、久し振りでの出し物、成駒屋所藏の台詞と、暫の正本を原として竹柴梅松が書足したもんだ、幕明に新十郎が口上面白く、擧幕から、暫くと聲をかけ、紅白の梅の折枝を挿した烏帽子を車鬢の島田鬢、柿の掛素袍に鶴菱の振袖、艶麗無雙の內に凜として生氣のある處、さすがは豪いものだ、御定りの元緣見得も都て女の腹を失はん趣向面白く、女だてらに辨舌を振ふ處が此人の藝風に箔つたのも不思議であつた、「弱虫どの、サヲバ、〳〵」で幕外に殘り、ガラリと調子を世話に碎いて「チヨイと新十郎さん」と後見を呼び「わたしやもういやだよ」とダヾをこね、色々と勸められて澁々と承知し、新十郎が、ヤツトコツツチヤー、ウントコナの附聲で、太刀を擔いで二足ばかり六法を踏み、「もう出て來ないよ」とうの大刀を投りだし、「夢中になつて……オヽ、耻か

しい」と振袖で顔を隠して逃げ込む處は、女の情を穿つて頗る大出來であつた、

市川左團次

拔目はない

世才に通じ金儲の巧さ事成田屋に及ばず、而して技藝といふよりも寧ろ商賣に演劇をすると言ふ主義故に全然音羽屋とは反對である、其住宅なんぞも請負師かなんぞのやうに見へて、團十郎や、左菊五郎の両優とは大に其趣を異にして居る、故守田勘彌が團菊左三人の性質に就て評した事があるが、譬へば三人で料理店に行き、さんざ飲食した揚句、いざ勘定となつたならば、菊五郎は兩人に拂はせて其割前を遁れやうとする質で、團十郎は持合せがあれば一人で出

金すれど、若し無ければ人に出させて平氣で澄し込む質である、尤も立替たからといふて後で催促をするやうな客ではないが、又其代り人に借りても返さうともしない、處で左團次と來たら、自分の財布から金を出して割前勘定に仕拂ふ質であると、實に此丈が心中を穿ち得て妙といふべき適評である、

市川權十郎

江戸兒肌

當時俳優中の蓄財家で、概算拾五万圓だといふ、平常揚枝の先で重箱の隅迄も拂ひはじくる樣にして居る、其上大の理屈家で到底法學書生なんどの及ぶ處でない、家居無聊、終日徒然として座て居る、然も飲まず食はずで能くまあ辛抱が出來るものだ、(最も三度の食事

は此限りに非ず）道樂といふたら銃獵位、口に嗜むものは天麩羅、馬にも巧手に乘るが、先年堀切で失敗た後は止めて居る、併し或る方の馬はどうだか……唯だ鳥渡面白いのは其肌合許りだ。

御番匠の忰

權十郎は京都西の洞院伊勢屋喜三郎の忰で、嘉永三年九月十五日の出生だ、（今年五十三歳）父喜三郎は禁裏の御番匠で、代々帶刀御免の客柄だ、されば子供の頃から遊藝は充分に仕込まれたのである。

初舞臺

權十郎が十一歳の年であつた、嵐璃寛が四條の南の芝居で安達三の袖萩を演じた時、お君になる子役がないので、丈の親父に賴み込んで到頭丈と借りる事になり、ろてで璃喜丸と名乘せて舞臺へ昇らしたが、すると此事を母の實家である上加茂の親父が聞付けて大論判があつたが、此時の意地づくが眞實となり、お番匠の忰が遂に俳優ではなつた譯だ、

豐島屋の相續

嵐璃寛の弟子となつた璃喜丸は當時大坂中の俳優を壓倒した人氣俳優嵐璃班の跡を相續する事になつた、然し未だ此時は漸く十七歳の時で、技倆未熟の璃喜丸に名人瑠寛の名は容易に襲がせられんといふ說が出て、豐島屋（璃班の家號）の養子となつて更に離鶴と改名したが、家中の風波の爲め自分が居つては宜しくないと先見し、養家の實子に家を渡して去つた、處が果せる哉此各家も案の如く後に四

散して了つたが、璃鶴は夫から旅へ出た末江戸へ上つた。

改名と畜財

離鶴は上京の後大に魚河岸連の贔負を得、團十郎が門下として、同優の前名河原崎權十郎をは離鶴に遺つて呉れろと運動してくれ、種々込入つた話の末、河原崎權十郎は大夫元の名で有るから遺る譯には行かぬと、紛騒いだのを、古河默阿彌（其頃河竹新七）が仲へ入つて、河原崎權十郎で差支へがあるなら市川權十郎として、家號も川崎屋としたら宜しからうといふ事で、茲に嵐璃班改め市川權十郎となつて、其秋芝新堀の河原崎座へ出勤し、此時の狂言は河内山で、權十郎は宮樣師櫻井新吾といふ役をして大に名聲を博した、それから某三位に知遇せられ千圓の金を惠まれたのが基で、只今では十万圓に餘る財産となつた、實に權十郎なんぞは仕合せ者である、

澤村訥子

人氣者

近頃市村座を本據として第二流の俳優中第一の人氣、今迄はさびれて居つた同座も此丈が出ると歡客が來るとは强氣なものだ、それに悴が名題になつたので目下大嬉びな處である、生れは名古屋の者で子役の時分には八百藏と一座して諸處を興行して歩き、互に負けず劣らず張合て、度々舞臺で掴み合をした事もある、八百藏は其頃から奸佞狡猾であつたのに引換へ、訥子は善良快活で今でも其通である、女房は故助高屋の養女で、俳優の女房中第一番の利發者だ、訥子が人氣には實に驚き入る、客あり問ふて曰く　△「左團次と訥子

とは、何方が巧いのでせうかな」、答へて曰く◎「お咄になりません」△「然うでせう、どうも訥子の評判は非常でさ、」◎「然うですかそれは何方で、」△「横濱で言つてまさあ、訥子の忠彌を見た揚句には、左團次のは見られませんで、」ア、十人十色、世間は兎角これで持てたものだ、

中村時藏

江戸兒肌の好い氣風

父は中村歌六といふて、梨園社會では市川、尾上に亞での家格だ、生れは大坂だが、江戸っ兒肌で萬事華美を好み、傍に攝はす金を遣ふ、それゆゑに一座の俳優に嫌はれて度ふ失策つた事がある、先年時藏と團十郎とが一座をして居つた頃であつたが、時藏が九分

玉の大珊瑚珠を煙草入の緒〳〵にして有つたのを團十郎が見て播磨屋お前の持つてる珊瑚珠は土佐だらうなといはれたので、グット癪に觸りナアニ本玉さ、此通りと其處にあつた狂言方の拍子木で其珊瑚珠をポント叩いて二つに割り、オイお狂言さん、拍子木に瑾が付たらう、其お詫だと割た珠を與へたので、流石の成田屋も肝を潰し、播磨屋には戯談も言へねゑと云つた事がある、氣前といふたら先づこんな風の江戸兒肌だ、

市川八百藏

馬車將軍

性質傲慢で無暗と威張りたがり、愁心せた他に讓らずといふ人物、自ら好で、敵を設け怒を買ふ、是遂に東京の各劇場に容れられずし

て遙に奥州の果迄も恥を暴しに歩いた原因だ、

本名は橋尾龜二郎、俳名中車、綽名は馬車將軍、劇道界にては八百坊主、之を畧して單に坊主〳〵と呼ぶ、恰も團十郎を眼玉、菊五郎を爺ころなんぞと呼ぶと一般である、讀書は出來るといふ程ではなけれども菊五郎の樣に書拔に假名を振て貰ふ程でもなく、紙細工の巧手なのは此丈の隱し藝で、間がな隙がな剃刀を手にして作つて居る、彼の鶴沼の別壯を紙にて摸造した如き、其の精巧實に驚く許りである、

夫婦喧嘩……嫉妬から

八百藏の女房は仙臺の虎屋横町の藝者家の女主人であつたのだが、八百藏と割なき交情となり、到頭藝者家を人手に渡して八百藏と夫

婦になつた來歴があれば自ら羽振宜しく、其上今の俳優の女房中で第一番の妬嫉といふたら、先づ此女房だらうされば、時々嫉妬喧嘩をする事がある、餘り燒くのも宜しくないな、

女房「サア殺せ〳〵殺しやアがれ、人に是迄散々ばら苦勞をさせて置ながら、何處の馬の骨やら牛の尻尾やら知れない女なんぞと巫山戲女やがつて、サア殺して呉れ、サア野郎早く殺せ、

八百藏「ウヌ勝手な熱を吹きやあがる、サア出て往け、此家の諸道具悉らずくれて遣るから、何處へなりと行て了へ、

女房「イヤダ〳〵、死無きやあ此の家は出ないから……一体お前の力で今日の樣な俳優になつたと思つて居るから間違つてるんだよ、

ドダン、バタン、女房「ウヌ撲やあがつたな」、八百藏「何をコン

畜生」

是をこれ八百藏夫婦喧嘩の速記録となす、

またさうかと思へば女房殿は齡にも顏にも似合ない紫の被布なんぞを着込んで、

女房「チョイとお前さん、そんなにれ酒を飲んで宜いの。

八百藏「飲むなら盃を遣らうか、

女房「妾は寢る方が良ワ、

と秋波一督、イヤハヤ齒の浮く樣な事もある、

尾上松助

經濟主義

今の下廻り俳優は姑く置いて、苟も拾指の中に屈せられる名題俳優

の中で、夫婦共稼ぎといふたら恐らく松助計りであらふ、日々見る新聞は先頃迄近所の家のを借りて用を濟し、晩餐の膳はほんの義理程の御馳走で、其儉約なる事といふたら驚く計り、凡そ名題の俳優になると幾等少くとも五人や拾人の門人があつて、それが爲め舞臺では役に立たない者に迄何程宛か小使か給金を拂つてやらなければならない、處が此丈は弟子といふたら一人も置かないといふ方針で「弟子があれば外へ出ても餘計な給金を拂はねばならんので、師匠の方でも自然と給金が拂ひ惡くなる、からして詰る處が此方の身を切られるやうで損な話だ」とは是れ此丈が平素の意見であるのだ、それ故人は何と言ふが、金さへ蓄めれば宜しいと心得、今の女房が素と菊五郎の家のお針であつた縁で、當時尙菊五郎が衣類の裁縫を爲し、相當の賃錢を蓄めつゝある、其効あつてか、昨今は相應に金

が出來たと見へる、丁度五年前歌舞技座で菊五郎の所と、松助の所とへ、百圓紙幣で給金を拂つた事があつたが、切れ放れの宜い菊五郎の方は直に百圓の兩替をしたが、松助の方は到頭兩替に來なかつた、すると其時奥役の甲子屋萬藏が、ハヽア松助さんも出來ましたねと咄した、それからして最早や五年も經つて居るから、此節は福々であらふ、

大坂生れ

此丈の父といふのは、彼の笹子峠を越えて甲州の方へ參ると、栗原といふ處がある、此地の者で、天保の初年彌助といふ者があつて、江戸へ出で來り、幸四郎や高麗藏なんぞの男衆と成て勘公と言つて居つたが、高麗藏が大坂へ往た時、共に一處に往て、下の關迄附いて行つたが仔細があつて高麗藏に別れて大坂へ舞戻り、日本橋邊の旅人宿の下男に住込んで居つたが、其中女中のお氣と呼ぶ者と夫婦に成つて、天保拾一年男の兒を設けた、此兒が即ち今の尾上松助である、されば故丁度當年六十三歳といふ老年だ、然し未だ其頃ほひは天保の御改革で以て、大坂に居つても面白くない所から、妻子を連れて遥に東の江戸迄下つて參り、森田座の衣掌の頭となつて、栗原の彌助といふて居つた」

弟子入の始

師匠は八代目團十郎

父の此彌助は兩國邊に住居して芝居へ通つて居ましたが、悴は是非共俳優にする積でチヨコ〳〵歩きの時分から、八代目團十郎の弟子

にして勘子と云ひ、五六歳の時から早くも舞臺へ出た、處が親父が男衆をして居つた時の名が勘公であつたから、樂屋では此時も矢張り勘公々々と人が呼んでので頗る雜らはしい、凡て後には悴の方を小勘子と言つて居つた、

舞臺で糞

丁度弘化二年の九月、河原崎座で伊賀越の狂言を演じたが、其時は龜藏、大内記、澤村宗十郎、政右衛門等の一座であつたが、試合傳授の場で、松助の小勘子が小性になつて出て居たが、漸く六つ位の時であつたらふ、或日の事舞臺で頻りと糞の臭氣がするから、オヤ變だせ、まさか舞臺へ掃除人が來る氣遣もあるめゑがと皆々不思儀がつて居つた、其中幕が閉つて、小勘子がひよいつと立つと、コハも如何に五月頃出たての蘿摩芋と見擬ふ計りの糞がコロ〳〵と轉がり出したので、一同どつと大笑をした事がある、

踊の温習に出る

當時の子供俳優は隨分良い給金を取つて居るが、昔の子役と來たら精々一と興行が四十二日で、漸く百疋と定まつて居つた、それで綺羅が好く無いと良い役が附かないのであるから、其時分の子役には勿々金が掛つたものである、處が何分松助の親父は芝居の日拂で以て僅に生計を立てゝ居る位の貧困であつたから、悲しい事には自分の悴に金を掛けて遣る驛に往かない、隨つて又良い役も附かない所から、芝居の方へ出るのは極稀で、重に踊の温習へ計り傭はれて行つて布晒しや、石橋の取卷に出で居つたが、夫れで漸く一度に二両位

にしかならなかつた尤も此頃は踊が頗る盛んで中村座あたりでは二月の始から四月頃迄は此踊で溢習が引續いてあつた故、小勘子なんぞは芝居へ出るよりは此方が餘程割が宜かつたのである、

名優となるの兆

松助が十歳の時であつた、其頃上州や野州邊では毎年夏になると祭禮がある、其度毎に江戸からわざ〳〵子供俳優を抱へて行つたもので、松助なんぞも毎年稼ぎに往つたものであるが、此夏に上州足利の祭禮に買はれて行き、落人の伴内を演じた、處が是が非常に人氣に叶つて大に喝采を得て、天鵞絨を一疋貰つて歸つた事がある、栴檀は雙葉からして董しく、獅は生れ乍にして呑牛の志ありとは能く言つたもので、流石は明治の梨園界に其老巧を賞せられる程の名題となるだけあつて、此頃から既に名優の兆はあつたのである、

音羽屋の弟子となる

松助は二十四の年に菊五郎の弟子になつたが、未だ其頃は師匠の菊五郎が家橘といつた時分であつたから、師匠か名の橘といふ字を貰つて橘平と改名し、此橘平で暫くの間通したが、其後又、梅五郎と改め、相中上分で殊に長い間辛抱して居つた、

先の女房

松助は若い時分から踊の溢習に出たり、又は旅を歩いたりした事があつたから、髄分浮た話が有りさうなものだが、生憎其方は至つて堅人で商賣柄に似合はない位だ、それ故女に關した艶話は更にない

其堅いのを見て師匠菊五郎の妻君のお里は自分の妹を梅五郎に嫁らせたのであつたが、程なく其妻は死去した、然しそれ等の縁で六代目尾上松助となり名題に昇進したのが明治十四年で、新富座の夏興行に披露をして喝采を博した、

船頭と間違へらる

菊五郎が沼津へ出掛た事があつたが、其時却々面白い話がある、なんでも其折に菊五郎と沼津方との間で話が纏まつたので猿若町の表方が苦情を言ひ出して頻りと遣らぬ工風をした、けれども沼津行の話はモウ出來て居つたので、網船に行くと言ひ僞つて元地の宅から舟に乘つた、其時梅五郎が船頭と成澄して師匠の伴をし汐留へ上つた、すると迎に來て居つた沼津の座方は松助を（其時分は未だ梅五郎と言ひ居つた）眞の船頭と間違へて大笑ひをした事があつたが、其時松助は一處に往た市川幡左衛門に、是からは些つと俳優らしく仕ませうよと、咄したが、今だに依然として俳優らしい所はない、

乘込の閉口

此時の一座は菊五郎、家橘、三十郎、梅五郎等で、一行は三島の武藏屋へ着した、是から沼津まで三里の間重立つた、俳優は上下紋付で、花駕に乘つて棒先に各々俳優の名を墨黑々と書いた札を立て、練り行くのだと言ふから、俳優には珍らしい内氣の梅五郎は、どうぞ夫丈けは免して呉れると、只管頼み込んだが、生憎と又駕が餘て居るので、是非共乘つて呉れろと座方の頼みに、先生餘儀なく酒を飲で醉た勢で漸く乘込んだ、

弟子を持たぬ原因

松助が弟子を持たない原因は譯のある事で、先年迄新富座へ出勤して居る頃は、たつた一人弟子があつたが、其弟子が座方から手附を取つた後、總浚の前日に逃亡して了つた、すると正直一方の松助は大に氣を揉んで、奥役の斧丸に其譯を告げ、手附は自分からお返し申ますると詫ると、斧丸はいや結構です、實は有餘る下廻りだから手附だけで休んで呉れりやあ有難いんですと言つた、そこで是を聞た松助は成程我々風情に弟子のあるのは座方の迷惑だと悟つて、以來は、斷然弟子を持たない事にしたのだ、兎も角一風變つた人物で今の樣な名を得たのも謂れなきに非ずだ、

澤村訥升

氣焔萬丈

此優が大の嗜好といふたら小説で新版物で、讀まない物は無い位だ今に筆を採て短篇小説を書くのだと氣焔萬丈、それに先頃故田之助の娘と夫婦になつたので頗るお樂みの光況である、

門地からいつても技藝からいつても、又女形として舞臺に立つた處も、勿々美しいが、然し芝翫なんぞと並べて見ると悲しい事に貫目が足りないよ、去る十一月狂言に市村で芝翫が演じた、女暫の時、紀の路を遣つたが、翫太郎の震齊に賴まれて、暫を追返へさうとする際、新駒屋の阿姉さんと口を切る所、實に此丈の貫目が足りんのが顯はれて見える、然し外の連中に交つて女形で行けば先づ〳〵立

派なものさ、

片岡市藏
其人物

最初はお寺の小僧、中頃は提灯屋の丁稚、それが遂に俳優と變じたのだから、理屈も想應に解り、讀書も可なりに出來る所から、俳優組合の頭取に撰擧されたが、何がさて性來の大臆病にて物事を決する勇氣なく、唯お茶を濁すに過ない、扨も人間といふものは顏付に似合ないもので、軍人の話が大の嗜好で、耳を傾けて聽聞し倦く事をしらない、近來は少く金を溜蓄した所から、啖吐と共にの諧に漏れず、愈〻客になりて池上へ別壯を新築し、其處へ籍を移して郡部の鑑札を受け、營業稅の負擔を輕くしやうとする有樣は誠に拔

目のない人物である、

市川染五郎
當世男

グード、バイ。アイ、サンキ、ユー。位な英語も知つて居り、又讀書も一通りは出來て、普通の書拔を讀むには差支は無い、それに團十郎の娘の實子といふのを占領して了つたとかいふ噂迄あつた位なので、勿々好い勢だ、何にしても面の宜いのが此優の僥倖さ、これから先き勉强して出世を祈るが肝腎、未だ巳の地位に安ずる樣ではいけぬ、元來今時の若手俳優は少し名題にでも昇りて人氣が附くと直に天狗になりたがるものであるが、此優なんぞは先づ〳〵俳優として其地位を汚さん者だと賞めて置きたいが、ドッコイ、さうは

いかぬ、

感心な志

市川家の人氣俳優なる此優は、十一歳の時から始めて舞臺へ現はれた、後團十郎が春木座で盛綱を演じた時、染五郎は小四郎を勸め、腹切の一役諸見物の涙を絞らせたが、これより染五郎は世間に名を賣出したのである、それに男は好し、踊はあり、藝の上達殊の外速であつて、忽ち都下觀客が注目の消点となり、俄に非常な人氣を占め、先年團十郎が歌舞技座で妹背山を演じた時、猿藏と共に玄蕃、彌藤次を勸め、一役名題にこそは昇進したのである、されど染五郎は常に心掛けが宜い人で決して傲慢心を起さない、居常人に話すに、自分が今日ある迄の艱難辛苦は、實に廢業して了ふと思つた

事が何度あつたかしれん、その辛い哀しい憂目を凌いで漸く僅に恁くの仕合になつたのを思ふと、昨日迄朴木齒の足駄を引摺り、太身のステッキを振廻した連中が、假初にも舞臺に上つて俳優にならうとは驚いて了ふといふて居る、

市川猿藏

質屋が宜い

伯父の市川團十郎が猿藏を評して、お前は俳優を廢めて質屋をした方が宜からうと云つたさうだ、此一言で以て猿藏の人物如何は知れるであらふ、樂屋では此優の綽名を犬張子と呼んで居る、名前が猿藏で、綽名が犬張子とは、猿と犬、よく〳〵違つた名だわい、

市川米藏

好一對

指先が至つて器用な質で、暇さへあれば細工物をする、其熱心でよく作る事は恰も八百藏の紙細工と好一對だが、然し其割合に技藝の出來ないのは、ハテ扨て是非ない事だ、せめて八百藏位に出來ればよいが、

市川猿之助

女房天下

三太郎頭といふて相中上分の悴だが、大坂で勸進帳を演じた爲めに圍門を破門せられ、爾來松尾猿之助といふて居つたが、今より丁度

十年程前破門を許されて歸京し、鏡臺を三階の大部屋に並へて一興行じた効あつて、中米の娘の婿となり忽ち茲に出世をした、其替り年中女房の尻に敷かれて金槌の川流で、頭擡らず、芝居の給金は女房の手に取上られて、毎日宛がひ扶持の小遣を貰ひ芝居に通つて居るされば、一杯の酒、半霄の勸樂も自由にならず、扨も情無い身上であるが、御當人は是でも峯丸具へた我かと、別に嘆息する樣子も更にないは、能く〳〵お心好しの質と見へる、芝居の狂言は固より、已が着る衣服の縞柄迄も女房の許可を受けなくては極らないのだとは扨も〳〵、

尾上榮三郎

前途多望

油繪に熱心で、人物の肖像ぐらひは先づ書けるやうに漸く成つた、うれに寫眞も好で佳ありに撮るが、願くは其暇で俳優の方に凝て貰いたいものだ、然し菊五郎といふ有難い師匠が附いて居るので人氣のあるのは感心なものだ、されば先頃中央の投票にも到頭青年俳優中第一位の多數を以て遂に美爛月を奪ふ計りの大緞帳を受領したがあれは榮三郎の技藝が青年俳優中第一であるといふのを証明するのではなく、全く音羽屋のお蔭と思はなければ違ふ、當時芝翫を除いては女形に好いのが乏しい折柄であれば、今一と奪發して天晴れ榮三郎の榮三郎たる所を世に知らしめるが肝腎〳〵、然し他で餘り大切に仕過る人があるのが何より上達の害だ、少し固くした方がよろしからうと、是は著者が老婆心さ、

澤村源之助

本業外の商業

萬事都てが菊五郎張で、千束町の住宅の如きも大に茶がつて居る、然し乍ら相變らず男地獄が盛んな評判で中々能く賣れるさうだ、家橘なんぞの如き姿色無くして賣口よしとは何處かに云ふ可からざる味があると見へる、偖もたで喰ふ蟲も好き〳〵なるかな、

市村家橘

無上の光榮

坊チャン育ちの分らず家ながら、親爺の氣風を受襲で寛濶な處がある、今少し讀書が出來たら宜からうに、其方には一方心得のないの

は此優の爲めに惜い事だ、然し乍ら僥倖にも成田屋の仁木で家橘の男之助なんぞ、と千載一遇の歌舞技座狂言に出る樣になつたのは誠に無上の光榮だ、先づ〳〵眞面目で堅く藝を學ぶが勘針〳〵

中村勘五郎

未た老いぬ

なか〳〵古い俳優だが、何處が又別に人の氣に適合する處が有ので何時も〳〵好い方だ、台詞の工合、廻し振りが齒からもれやうで太くは出ないが、惡黨や、なんぞを遣らせたら流石に上手なものだ、先頃市村座で演じた、成田五郎に破輪王なんぞが先づ此優を代表すべき所であらふ、

尾上菊三郎

惜いもの

稽古上手の舞臺下手と菊三郎の事だらう、正本に向つては隨分理屈も並べ、改竄もする、段取も巧いが、扨て顔に白粉を塗て、衣裳を着飾て舞臺へ出ると、口先の半分程も來出ない、畫もかけば、字も書くが、技藝に至つては全く其反比例だ、菊三郎にして其口程藝が出來たら貴いものだが、さりとは惜いものだ、

尾上菊四郎

あんなもの

地位が地位と、技藝が御存じの通りだから、到底も看客の目を悟く

程の事は出來まい、又さうさせやうとするのは無理に注文である、一躰此優なんぞも今少し藝に身を入れて、演ずれば未だ〳〵上達はするが、先頃やつた、猪股平六や、千島禮三、それに眉間尺の四思明ぐらいを遺つて甘んじている心では出世は出來んよ、何んでも師匠を驚かす程になつて貰いたいものだ、

市川團藏

潔癖が瑾

若い時から江戸の歌舞技を飛出して旅から旅へと稼ぎ歩き、自分の門地を棄てゝ掛つても、名人は名人だけに墮落もせず、優に一方に雄視して居る、性質至つて潔癖であつて便所へ行くにも裸体でゆくといふ、一風變つた妙な質だ、それに惡い癖があつて、興行が當る

と身上(給金の事)にとたはつて來る、それ故遣ふ芝居が割に少ないと處へ以て行て近頃は齢を取つて身上は多きを望み、出る幕數は少なきを望む、詰り樂をして金を多く取らうといふ工夫をする故猶更遣る人が無い筈だ、藝といひ門地といひ誠に惜いものである、

素性と幼時の惡戯

天保年間鼓町に萬久といふ料理店があつて、其料理人要藏といふ者に一人の子があつたが緑あつて先代(六代目)團藏の養子となつた、是が即ち今の團藏である、幼名を茂々太郎といひ、天保十五年三月中村座で八代目團十郎が助六をした時、尾上熊吉(梅幸菊五郎の男)と二人で茶屋廻りに出たが、初舞臺で何かも惡戯でいたづらで仕方のない子であつた、其年の五月狂言に道明寺の場で、(幸四郎に頭を撲られたを口惜しく思ひ、其後復讐として)中鶴の偽迎ひが後に挾箱

を抱へて出で、猪三郎の兵衛、幸四郎の宿直太郎と密計の場で、件の挾箱を開て見ると鷄が無いから遂に一同の大騒となり、其日の芝居はめちや〳〵になつて了つた、そこで此鷄を引出した罪人は茂々太郎だといふ事がしれ、爲めに其當座中村座の樂屋を禁じられた事がある、それから弘化二年白藏と改名し、安政三年九藏と改めた、其時分吉原の花魁の小稻と好い仲になつて浮名を流した、降つて明治三十一年二月市村座で七代目團藏と改名し、皿屋敷の鐵山と三上胴六の二役を勸めて大入を占め、同年七月大坂へ二た興行二萬圓で出勤した、兎に角團藏は世話、時代兩方とも巧いものである、

女俳優界

女優の內幕

警八風吹荒ぶも到底淫風に打勝つ能はないのか、近來娘義太夫の連中が淫を鬻ぎ、白晝大膽、然も活春畫を描くと噂さる、果して信である乎、さる中に品行正しきは女俳優で、浮いた嫁業に珍らしい、決して枕席を拂はずとか、愛すべし其狀やと書かけんとしたが、ドッコイさうは行かず、女俳優の殊勝らしく見ゆるのは其筈よ、醜婦の淫婦には恐れ入るからね、よくお目を留めて御覽じろ、舞臺面は人並らしい、かつらにもせよ、紀久八にもせよ、かつら、紀久八にて舞臺に在る中こそ可憐しけれ、本名お何と成つては、ねゑ、ねゑ、

と皆様御推もし遊ばせ、言はぬが花だ、

女俳と情夫

一躰婦人は情夫でも出來ると急に艶飾すのが常であるが、女俳優は夫に反對である、樂屋に情夫が出來ると、直に已の姿を棄てゝ了ふのが一般だ、之を試して見ると百人が百人迄其通りでないものはない、とは或老齢の女俳優の話だ是だから女俳優の品位を高めやうの男女合同をせたいのと騒いだ處が倒底駄目な事だ、

市川△△△

今の女優が内幕の如何であるかは、即ち此△△△の半世を讀まば、思ひ半に過ぐるであらふ、實に彼が半世は女優の内幕を証して居るものだ、

△△△は弘化三年(或は少し嘘かもしれん)の生れで、極身分の低い者の娘だが、お狂言師坂東三津枝の弟子で三枝八といふものゝ弟子となり、改めて桂八と名乗つて、お狂言の下廻りをした、是は△△△が十六歳の時で、それから三津枝に連れられて、大名屋敷へお狂言に上つて居つたが、白縫譚に雪之助をさして貰つて初めて評判が宜かつた。

旗本の妾となる、弟といふは悴

處が△△△の母親は可なり容貌が美かつたので、牛込神樂坂邊の旗下某の隠居の妾となつたが、此隠居が悪い奴で、△△△を已が甥の妾にして金を絞り自分の喰物にしたが、其中△△△は某の胤を孕んで産をしたが、其後此某と別れて、生んだ男の子は人に遣りましたか、此子が後に成長して義太夫語りとなり、△△△の演劇で

チョボを語つて居つたが、自分の子といふ事は深く隱して居つて、弟だと、今でも云ふて居る、

菰張の女芝居が始まり

其頃すでに兩國では菰張の女芝居があつて、本戸錢が十六文、重に折助や田舍者などが見物に入つた、それから△△△は寄席へ出で演劇をして居つたが、勿々の困難で晝夜稼いで漸く十二錢位にしかならなかつた、其時分は△△△も十九か二十歳の女盛りであつたから席亭へ張りに行つた道中も隨分多かつた、

旅へ出て情夫が出來遂に夫婦となる

其後△△△は旅へ出たが、元來器用な質で團十郎の身振や聲色を遣つて見物人を驚かして居つた、今迄は獨身物で居つたが此旅から旅へ稼いて歩く中に、不圖した事から狂言方の藤基助といふ者と情を

通じて遂に夫婦になつた、大概女俳優の亭主は狂言方、囃子方、小道具方、床山等で、一座の者が多い、何れも初めは通じ合つて後に夫婦になるので、怪しからんものだ、△△△計りはと誰でも思つて居たが、遂には同じ怪しかん連中になつたのである、うして此基輔には女房お袋のある處から、△△△は三百圓出して女房との縁を切らせ、二人の女の子とお袋とをば引取つた、

團十郎に拾はる

それから△△△が旅から歸つて來た時には錢入に一圓しか金がなかつた、併し夜更けの事でもあり、我家へ歸るのも面倒だからと、淺草の或る旅人宿へ泊つたは宜しかつたが、便所へ行つた時、誤て錢入を雪隱の中へ落した、是には△△△も大に閉口したが、忽ち宿料に差閊へるといふので夜中糞壺の中を探して漸く拾ひ上げて宿料

を拂つた、それより種々苦勞の末團十郎の門に入り升の丕と改名した、

破門と歸參

それから團十郎の引立を蒙つてる中吾妻座といふ鈍張芝居へ出で名前を取上げられ、間もなく新潟で勸進帳を演した爲め到頭破門されたのを、去る三十年櫻痴居士が口を利いて復び歸參叶ひ、更に九代目の九の字を頭に附けて△△△と改名するに至つた、

女優樂屋の醜態

女俳優の内幕ほど醜態なものは無い、樂屋へ行つて見ると小兒の襁褓が干してある又は紅隈を取つた俳優が鏡臺の前へ向つて小兒に乳房を含ませて居る、そして此樂屋には素つ裸躰へ越中褌一つして

大胡座を掻いて膳に向ひ、亭主に給仕をさせて飯を喰つてる女優もある、それで寄ると觸ると仲間の妬咄に、果は頭取部屋の前で聲高に罵り合つて摑み合となる、然し久米八の出る劇場には師匠がゐると互に身を謹んで樂屋は實に靜かだ、それに襁褓なんぞも見えないが、田舍の女俳優となると大變なものだ、仲には着て居るものは冬も双子の温袍一枚、夏は浴衣一枚でお座敷があると借着をして行く、舞臺へ出ると俳優、座敷へ出ると淫賣、イヤハヤ旅俳優なんぞと來たらお話になつたものではない、

女優の一と口評

澤村紀久八　女俳優中變りもの、一人として數へられるのは此紀久八だ「妾はこんな風變りな氣質ですから女俳優のやうな何事でもべちやく苦情なぞをいふて居るのは大嫌ひです、どうか是非書生

さんの方へ、お仲間入りをさして頂かして、サッパリと面白おかしく踊つて見たいと思ひます、ですから着物も羽織も皆んな筒袖にして了いました」とは色變子の言、全く彼が心の中を穿ちてみれば斯くの如くである、

千歳米坡　海に千年、山に千年、河にも千年、都合三千年の老功もの、其千歳の千の字は此千年の千の字と、今一つは面の皮の千の字を、意味して居るのだとは好い適評、日本六十餘州を胯にかけ、昔は光妙寺三郎に入り揚げ、近々は後藤の猛太郎に關係して、洗つて見れば數へ來れない程の戰場往來のつはもの、それでも今尙化けた處は若い連中と少しも變らない、然し斯ふいふ女に仕込まれて出來上る今日の女優は、到底斯界の改進なんぞといふ事は望めない話だ、

尾上梅代　音羽屋の門に入つて梅代と改名し三崎座より打て出でたる彼は、僅か四錢の木戸錢を取つて見せる頓張役者の群へ置くのは惜いものでかる、と擔いた處で未だ到底も檜舞臺い上せる譯にも行かず、年の若いのと、顏の可なりなのとで、呼ものとはなつて居るが、女形の役を女が演ずるのであるから、思つたよりも樂であるのは必定なこと丶最負運の目から見た日には克く見ゆるのは無理もないので、先づ此さき勉強が肝腎〳〵、而して其裏面を探つて見れば又あぶけない處もあるよ、

鯉昇　姿の粹な事、實に此丈の得の處、先頃演じた髮結の金五郎なんぞと來たら、其中でもよく見えたよ、一躰女俳優の身格はどうしても男と異つて居るから、粹な姿は少ないものであるのに、此優の樣なのがあるとは不思儀、臺詞廻しといひ身のこなしとい

ひ、りして又女形にも融通が利くといふ代物、何にしても好い俳優だ、とはちと賛め過た言葉だ、

錦糸　女俳優界の大立物、他に類の少ない大柄に見へる、それに何處となく貫目があるやうに思はれ、どうしてもあの連中では座頭といふ格だ、此優がなかつたならば、恐らく一座が芝居にならなからう、何となればその代になる人間が差當り見當らないからね、他の連中では一人で舞臺を皆負つて立つ事は出來まい、

米花　先頃の狂言に領の小さん、田宮源三郎の二た役をした が、思つたよりは克く遣つて除けたよ、毎時ながら、可なりに舞臺を濁して居ないで、眞に心を、斯道にのみ入れて一と奮發してはどうか、前途は未だ長いよ、

若八と崎昇　これ等も前者と一處に、非人勘太、女房おつる（若八）。妻お町、千葉屋お榮（崎昇）を演ずる處を見たが予の目に止まつた處では米八の方が好かつた、然し二人ともあんな事では俳優とは言へんよ、ちとお氣を取直して藝に熱心してはどうだ、

新俳優の現況

壯士俳優の給金

壯士俳優の給金は無論比較的に安いものである、其親玉でも大概一興行（凡そ二十日程で）五百圓から七百圓程が相場だされば夫から以下の俳優はスッと降つて三百圓二百圓位が大頭株が給給金で女形では腕利と稱せらるゝものにても、僅に百圓未滿である、こんな事では、新演劇だの、新俳一だのと威張り散らしても到底駄目な次第である、

新演劇作者の報酬

されば右に準じて作者の報酬も頗る安い、先づ一演劇の脚本著作料凡そ二十圓位である、それも作者を要するものは甚だ稀で、大抵は俳優自身が新聞雜誌の小說や、又は雜報なんぞを捻くつて好い加減に誤茶魔かし、之を直に舞臺に上せるのである、されば好い物の出來ないのも無理な譯ではないのである、

角藤定憲と新演劇

抑も新演劇とは何である乎、即ち書生芝居或は彼の壯士劇と呼ばれたもの〻進化し來つたる、否寧ろ自ら冒し稱けたるもので、現時は是が立派なる固有名詞となつて了つたのである、されば其初めより

文學的の趣味もなければ、美術的技能もなき、全く空々無意味のものであつたにも拘らず、之が一時は社會の風潮に投合し、非常の喝采を以て世人に迎へられたので、今こそ稍〻其聲價を墜落させたるの觀なき能はずだが、實に一時は在來の舊演劇を壓倒して獨り梨園に覇たるの勢を示したのは正に爭はれない事實であつた、而して此新演劇が兎も角今日も尙ほ在來の舊劇と相對峙して世に迎られつ〻ある以上は、此表面或は裏面の觀察を錄して、世の嬉好者に介するも蓋し無益ではあるまい、そこで此新演劇が何故に斯かる勢力を得たるかと言に就て、先づ吾人の言はざる可からざるのは、此新演劇の開祖たる首藤定憲其人の功勞？より始めなければならんのである、

初舞臺の狂言

そこで此新演劇が始めて世の中に現はれたのは今から丁度十七年前明治十七年四月の頃であつた、大阪越後町で新町座に於て、角藤定憲一座と名乗つて打つて出でたのが新演劇の抑も嚆矢で、其時の狂言は角藤が自作の豪膽之書生と題するものであつたのである、

抑からの棚卸

一躰此角藤定憲が何んな人物である、そして又此新演劇なるものを始あて組織をしたかといふに、角藤は素と岡山縣の者で、久く大阪に遊んだ揚句、自由黨に這入つて四方に奔走し、又或時は東雲新聞なんぞで椽大の筆を誤揮ひなすつて、縷々勿驚五十萬丈の氣燄を吐き、身は微々たる一寒書生の瘦脛に、堂々内閣大臣の椅子を踏み踏さん許りの豪勢であつたが、然し其内幕を顯みれば下宿の階上一升酒の醉心地もあはれ醒めては悔しき月末の宿料に、國庫缺乏

と澄しても居られず、下宿の主人が督促は外交談判よりも恐しく、といの詰り苦し紛の籠城に、五寸の禿筆が命で、燒薯嚙り乍ら捻り出したる一夜漬の新小説こを、即ち彼が梨園の街へ足を容る、第一次の指導者となり、また渠が新演の旗を飜したる初陣の武器と成らうとは、素より自身も思ひ及ばなんだであつたらう、

りれから間もなく、豪膽の書生が小説となつて世に出てたが、その時之を發兌した大華堂の主人が發議で玆に新町座より新演劇の看板を掛けて打つて出る事とはなつたのである、けれども其時の込み入つた話は頗る長くつて、漸くと開場する都合になりたのだ、先新演劇の嚆矢と角藤の人物は斯んなものである、

伊井蓉峯と劇通

伊井は實に書生俳優中の人物なり、才子なり、又學者である、蓉峯が始めて淺草座に於て伊佐水一座を組織した時に、其中幕に出した四條畷小楠公戰死の場は蓉峯が推敲苦吟の作であつて、案を大平記から立てたのである、勿卒の作で素より一時の間に合せたるに過ぎんければ、所詮觀客の歡心を迎へる事覺束ないのを、さらぬだに座中芝居心あれど目に一丁字なき連等は、譬へば風に柳の木の葉侍といふのを風に木の葉の柳侍と言つた如き、實に汗背至極の沙汰である、名前こそ新俳優とは言へ、その無學なる事舊俳優と些の異る所もない、多少學あり、識あるの徒、何ぞ來て新演劇改良を計らざる、何ぞ來て蓉峯を救はざる、恁らんには新演劇なるもの遂に茶番に化し了らんのみと、是れ其當時に於ける蓉峯の愚痴であつた、然るに今は如何であるか、茲界に雄飛する蓉峯の名聲は、嗚呼彼は全く新俳優中の一人物に相違ないのである、とまあ賞めて置かう、

新俳優十人十色

河合武雄　「今の劇評家は只單に惡しとか善しとか、仰有る計りですから、どの點が惡るいやら、善いのやら、サツパリ分らなくつて直したくつても直す所が分りません」とは其愚痴を成程演ずる身になつたら定めし左樣であらうわい、

嵯峨清　「今まで隨分俳優の投票がありましたが私は一票も入つた……イヤ入れた事はありません」とは彼の實況、

水野好美　兎に角今では一方の重鎮となつて牛耳を執つて居る、性來至つて注意深い方だ、「舊俳優の眉の引方は、髭のある時代には自然眉が釣れるから眉尻が上るので、其時代にはあれが寫實なので

す、それを新俳優の中にも明治のものをしても、やつぱり眉の尻を上げて書くのは間違つて居ると言なければなりません」とは彼が常に人に語る處の抱負である、勉めよ水野丈、君が始めて伊佐水演劇の旗を飜してから以來、斯界をして今日あるに至らしめたるものは與つて其力多きによると吾人は信ずる、現下幾百の後進輩宜しく、君が熱心に則つて黽勉一番、以て他日改良の成功を期せよ、オツト是では餘り固苦しすぎたか。

金泉丑太郎　明治二十三四年の頃、大阪や京都で流行つて居た素人芝居の一人に、天丸といふのがあつた、是が即ち今の金泉丑太郎で、川上が初めて上京して後、再度の旗揚に力を盡して座員、撰定の任に當り、夙に其實權を握つて居つた、今でも宮戸座や常盤座を本據として相變らず演つてはゐるものゝ、先づ餘り感服しない方の

連中だ、

藤澤淺次郎　素を洗へば京都の活眼新聞の記者、りれがどう了見違をしたものか川上が例の放螺にまんまと乘せられて、到頭書生俳優の群へと飛込んだのである、それ故彼が以前を追想した眼を以て、彼が演ずる所を見たならば、必ずや成程と思ふ處があるだらうであるから同じ連中の間でも少しは話せる人物さ、

中野信近　新演劇は腐敗しても、信近の精神は腐敗しません、筋の善惡はさて置き、彼の泥坊物や、探偵ものの外に一新機抽を立てたいと、自分は期して居ます、とは彼の抱負だ、

川上音次郎　始めは自由童子と名乘つて政界に身を投じ、獄に擊がれた事前後二十餘回といふばづれ者、それが仁和賀師の中へ交つて浮世亭〇〇と名乘り、大阪千日前又は京都の新京極座等へ出勤

したのが抑の始め、其次が仙昇福圓等の一座に入つて川上音次郎といふ看板を掲げた、これが即ち彼が書生役者となつた始めで、それより段々名を賣り出し、今ではどうやら斯うやら先輩として擔がれてるが、後進の利腕に敵すべうもなく、遠くへ遁げて居る處は憐なものだ、

義太夫界

義太夫の起源

抑も義太夫といふものを評し、且つそを語る處の各人に就て言はんとするのには、勢ひその起源と沿革とを知らねばならんのである、そこで此義太夫は素も淨瑠璃から出でたもので、元來淨瑠璃といふものは、織田信長の時小野お通に創まつたものであつて、其後三味

線といふもが我國に渡り來つてより瀧野檢校、角澤檢校が、彼のお通が作なる十有二段の戲曲を此樂器に合して謠ひ奏で、また角澤が門人に目貫屋長左衛門といふものがあつて都巡り見物左衛門なんぞの新作を著し、之に亞で井上播磨椽が播磨風といふ一流を出して、大坂に採り芝居を始めて取立てた、それから宇治加賀椽この流より考を取つて更に加賀風といふを開き、そして京都に於て別に採り芝居の新機抽を出した、

丁度此時大坂に天王寺五郎兵衛といふ人があつて、最も克く播磨風の淨瑠璃に妙を得たものであるから、播磨椽の門下から出でゝ、更に大坂で其時分既に採りを興行して居つた清水理兵衛がために其ワキをば語り、それから京都四條の芝居へ轉じて茲に清水太夫も改名したが、此芝居も僅に數ヶ月にして殘落に及んだので五郎兵衛は終に

彼の宇治加賀掾が一座へと加はり世評は此時からして彌〻高くなつたのである、

處が偶々此一座の中で、竹屋庄兵衛といふものが加賀掾と仲が悪るくなつたので、庄兵衛は天王寺五郎兵衛を擁して別に一座を創め、西國へと旅稼ぎに下りたが、貞享二年の二月に、五郎兵衛再び大阪へ舞戻り、そして竹本義太夫と改名し、道頓堀に揉りの櫓をば上げた。是ぞ即ち今の義太夫節の鼻祖であつて、竹本座の芝居も此時が等しく嚆矢であつたのである、實に今を去る事二百十有六年の昔だ、

夫れから降つて元祿十五年、豐竹越前少掾といふ人、播磨と加賀と、義太夫と、此三つの流を折衷して更に道頓堀に豐竹座といふのを設立し、これからして大阪では竹本、豐竹の二座並び行はれるやうに至つた、

江戸に於ける義太夫の沿革

江戸に於ける義太夫の始りは、等しく此上方より遺風を享けたもので、尤もその以前から肥前、土佐、外記などいふ流義はあつたが、享保十九年（今より百六十餘年前）豐竹肥前の掾始めて大阪より江戸へ下り、義太夫節の綾りを興行した、其後延享三年の大火に是まで在り來つたる綾り芝居は悉く燒失して再び興らない樣になつたので、其代りに上方から義太夫の綾りが續々と入り來り、結城座、薩摩座など等しく皆此義太夫の芝居とはなるに至つた、そして此等の各座へ出る太夫は孰れも權式を重んじ、特に其當時は寄席の營業は未だ公許であつた事なれば、此處に出勤するなんぞは思ひも寄らんのだが、明和七年に至り、如何なる譯だつたのか、竹本橘太夫、

同奥太夫、同兵庫太夫、仝時太夫の四人が、素人の家を借受け、席料二十四文宛取つて衆人に聞かせた、此時高座へ簾を懸けたのが不都合であると、土佐座へ出て居つた竹本伊勢太夫が苦情を起したので、到頭此四人は破門といふ事になつた、

寄席の濫觴

處が天明六年の八月に至つて綾り座關係の者が協議をした上で芝居が、休業の間は稽古の爲め他處へ出勤するも苦しくないと決定したそこで先づ第一番に、其時太夫世話役を勤めて居つた、竹本兼太夫が、島太夫、三輪太夫等と供に、鍛治町新道の自宅へ聽衆を集め、そして席料として客から二十八文宛を取つた、その後又寛政の頃に至つて三代目竹本政太夫（此人は二代目政太夫の弟子で、通稱を藤本利兵衛と呼び、文化八年七月十四日、行年五十九歳を一期として

歿せられた）が、素淨瑠璃許りを語り、各處の茶屋を借受けて之を專門の稼業とし、口語り、中語り、及び自身と三人で以て、綾り芝居のやうに一日通り物を語らないで、又一日毎に藝題を變へて、その前日に之を客へ披露するやうにしたものであるから、聽衆も頗る其の便利であるを打喜び、大に持て囃した、これ實に江戸に於て寄席の起る抑の濫觴であつた又淨瑠璃を一段づゝ語る事も此時から始まつた、當時百文の木戸錢を取つたのは此政太夫の外に八人藝の歌遊といふ人許りであつたといふ、

天保の禁止と改革

然るに天保二年卯の十月官令が下つて、素人淨瑠璃及び人形遣ひを禁ぜられた、其時の文に

近年、素人家にて寄せ場と唱へ、見物人を集め、座料を取り、

座敷淨瑠璃又は人形等、取変へ渡世致し候者頗多有之候由、右体の儀は古來より綾り芝居に限り候儀に候處、市中にて猥りに相催し候段不埒の至りに候、軍書講談、昔噺等の儀は格別、以來、人形遣ひを致し候儀は勿論、縱令淨瑠璃語り而已に候とも、相傭ひ座料を取り候儀は曾て相成らざることに候間、早々相止め可申候、

それから又同十年十一月二十三日再び官令で、尙前の文に追補、

右の趣卯年十月觸置き候處、近頃猥りに相來り、往來、辻々又は湯屋、髮結床等へ、大道具大仕掛なゞゝ申す張札差出し、或は看板等家前へ掛置き、芝居に似寄り候仕方、家業に致し候者有之候旨相聞え、不埒の至りに候、依に此度相觸れ候間、早々差留可申候、

されどその後此令を改革して、天保十三年より寄席の數を十五ケ處と定めらるゝに至つた、是より義太夫界は延て明治の今日に至つた尤もその間にも種々なる事歴はあるが先づ其沿革の大略を記して見ればこれな風である、

名人の名言

綾瀬太夫の直話

近代義太夫界の大名人と稱せられ、其技神に入るもの評を取つた綾瀬太夫が語られた詞の中に、

高席でも御座敷でも同じ事ですが、幾段となく義太夫が重なつて出る所では一番後座を語る太夫は、屹度ろの「はで」に語らなければならぬもので……其心得があつても中々出來るものではないのですが……若しさう仕なければ聽衆が飽きて座

を御立ちになるやうな事になります云々、

と、成程牡丹餅の後へ又牡丹餅では何人も飽が來る、そこへ味の變つたものが出ると、誰しも手を出す氣になるて、流石は名人の翁、又名言といふべき事である、

義夫短評

竹本大隅太夫　去る十二月四日より歌舞伎座で語られた、余も丈が堀川を聞いたが流石は義太夫界の泰斗として目せられるだけあつて、其デップリとして躰格といひ……嚴然として高座に上るや、亟簾が徐ろに捲き上げられると共に、早くも場の四方からは大坂より下つて來つたる此太夫を喝采の裡に迎へた、パチ〳〵といふ拍子の聲は耳も破れん許りではあるが、又其中には泰然と構へたる

此丈の氣に呑まれてか、充分熱心なる色と、多少の尊敬の意とが含まれて居つたやうな感がした、然し是は他の滔々者流に於ては到底見る事が能はない、眞に拔聳してゐる處で、その飽くまで愼重で、嚴肅なる態度は、叶の三味線に彌が上にも巧妙に聞え、殆んど感に打たれん許りであつた、それから十二日に「お妻八郎兵衛鰻谷」を聞いたが、是も又妙々の出來であつた、實に大隅太夫の如きは斯界の大斗として正に推すべきの人物である、

竹本播磨太夫　これも當今第一流の太夫さんである、全躰義太夫といふものは筋を語り又は文句に節を付けて演ずるものではなく、其極意とする處は全く情を語る處である、假令へば、三勝のサワリで言ふて見れば、誰しも「今頃は半七さん」とは語る事は語るけれども、此眞情を客に成程と耳の底い響かせ、りして心の奥に迄も達せ

しむる樣に語るものは極尠ない、其處へ行くと翁の語物なんぞは何れも皆巧妙なもので一つは天質の然らしむる處とは云へ、其熟練の程は深く感じ入る處である、

行本相生太夫　彌七の三味線で相變らずうなつて居るが、布引瀧なんぞは又格別甘いものである、そして此太夫の褒めべき所は只管聽衆の意をのみ迎へんと、これ力むる輩と異りか、一意其藝を重んじて衆俗をその双眼中に措かないのであつて、之を又換言すれば乃ち專念其儀に熱中してをる大の精勵家であると言はなければならぬ然し何人にも又多少の欠點といふものはある、されど其長所を以て其短所を補ふの妙を演ずる以上は又之れ上乘に近からんと言はねばなるまいと信ずるのである、

阿蘇太夫　此丈が語り口は從容として迫らず、騷かず、然もじり

〳〵つと克く其實情を語り込んで行く、されば、佐倉宗五郎の如き出し物に至つては妙の妙、正に此丈獨得の極意があつて、到底他の眞似たくても及ばない所があるを見受けられる……をつとでは ない、聞受けられる乎、絃は雷助だが此男も却々三味の力は輕妙なものだ、

時太夫　一体義太夫といふものは如何に上手に語つても情といふものを語らない義太夫程世の中に馬鹿らしくつて睡つたいものはない、されば此精神の籠めてない空音は、殆ど點睛しない龍の繪のやうで、情を語つて後始めて義太夫は生きるので、此情こそ眞に義太夫そのものゝ生命ともいはねばならんのである、而して時太夫の語り口は如何であるか、吾人は未だ全く此時太夫は義太夫の情を克く語るものといふ事は出來ぬと論斷する、正に今一歩進んで斯道の妙

を極めなければ、悲しいかな大造の三味線の方が勝つて了つて、あはれ、高尾太夫、錦太夫等一座の牛耳を取るの價は乏しいのである、

伊達太夫　今度又大隅太夫と共に大阪から來た、流石は名人の門に名人を出すで、此太夫も其席末（是は失敬）否一門として隨分とよく語る、そこで予も去る十二日にその「岸の姫松」を聞いたが思つたよりは感心しなかつた、元來義太夫といふものは情の外に「血筋で泣くな」といふ諺がある、是は一例を擧げて証して見れば、彼の菅原傳授の寺小屋で、松王が小太郎をお身代りに立てたと云つて泣きに泣いて居るよりも、源藏の方が充分泣いて居るやうに語らなければ悲歎の情を充分に顯す事は出來ない、尤も是は予が聊か此太夫を思ふ老婆心で、太夫も此心掛けはあるであらふけれども、三ツ兒

に聞て淺瀬を渡る諺もあるから、此言が同丈の爲めで一助ともなつたならば予は大に滿足する、

菅太夫　三木造の絃で樂師の宮松に出る居つた時、八陣と賢女鑑を聞いた、先は去る上旬で後はたしか十二日の夜であつたかと思つた、近頃は以前と違つて僕の耳にも餘程聞き馴れたから左程とは思はねども、悲しい事に菅太夫はどうしても菅太夫だけしか貫目がないのは致し方がないものだ、

峰太夫　是も十把一束の連中（でいちと酷であるかな、當人も近來は大分好く演る）では先づ可なりの方さ、それに絃が力之助と來て居るが、まあコンマ以上の價は乏しいよ、未だ〳〵一方の牛耳を取るやうな太夫さんとなるは遠い〳〵

織榮太夫　同じく峰太夫等と兵藏の絃で一座をして居る、以前の

語り口といふたら殆んど御話にならぬ位であつた、それ故其の後予も暫く聽かなかつた、又聽うと思ふ氣もなく、過ぎ去つたのである、處が先頃南傳馬町の祇園亭で日吉丸の三を聞いたが、あのへボ（ヲット是は失禮）かと思ひきや、どうして〳〵可なり語られるやうになつたには驚いた

和佐太夫　地位よりは割によく語る方ではあるが、然し未だ勉强が足りないから駄目だ、咽喉は天然の性であるから致し方がないとして、今ちつと節に氣を留めて貰いたいものだ、それに此男は義太夫の足といふものに頓着のないやうだが、此足の早い遲いは大に其語り口に關係を及ぼす事で、却々輕々に附すべきものではない、彼の先年迄女義太夫界の泰斗として第一の流行兒であつた、綾之助なんかは、如何にして彼の樣に多くの贔負を得たかといふに、（但席以外の秘密は別として）此心得が自由に出たといふ程ではなかつたが唯其語りものに依て足が早かつたものであるから、聽衆に飽が來ない。それ故自然と聞て居つても面白く感じられる、といふ處から彼の樣になつたのだ、さればいやに氣取らず、又ケレンを弄はず、極めて眞面目にそして自身が伎倆一杯に語る事に勉めるのが肝腎である。

朝太夫　僅かに舌三寸の調子と、氣管一個の動きか、腹から出ると咽喉から出でるとによつて、義太夫の功拙は別れるのである、方今斯界に於て上手と稱せられつゝあるものを求むれば、西には越路、伊達あり、東には播摩あり、されど朝太夫が名聲亦此等と相匹敵す然れば朝太夫もまた上手たるの一人であるか、而して此上手といふものは何人もなし得べきものにあらず、幾年の練磨と、修習とを積

んで然る後始めて上手と稱せらるるの域に進むのである、太夫が語り振りを聞くに、義太夫の最も重を置く處の曲中の人物が性格を現出せしめ、句々節々、情の眞に迫るを覺えるであらう、是れ太夫が技の上手と稱せらるゝ、所以であつて、到底他の碌々たるものゝ眞似べくもあらざる、妙であるのだ、且つ太夫は故らに聽衆の歡を買はんとするが如き態度なく、唯々自ら語り、自ら研究して、以て自ら滿足し、一意其機に熱中して專心、妙の極を求めんとしつゝあるが如きに至つては更に稱賛措く能はざる處である。

娘義太夫

流行の絶頂

今日は實に娘義太夫全盛の時代である、其大入を占める事、圓遊の

落語も又三舍を避ける程であるは誠に以て驚き入る、眞打の揚高一人一夜五圓を降らず、一ヶ月で百五拾圓、一年で千八百圓の所得、然も是だけはろつくり銀行へ預けても、食ふと着るとは御座敷の祝儀で有餘程どの事、高等官四等位に相當する其收入、娘義太夫の大景氣亦豪いものにあらずや、そして明治の始めに此娘義太夫が起源の再度は、山田といふ者が大阪から今の竹本京枝を連れて來り、諸所の寄席へ交渉したが、何れも土瑒者だと稱して取合れず、漸くの事で下谷の吹抜亭へ掛ることゝなつたが、意外の大入を取れるより、終には各所へ出る事となり、此京枝より始めて肩衣を付けて高座へ出る樣になつた、其後東玉、小傳、綾之助など相次で顯はれ、今日では京子、小豐後、新吉なんぞ最もよく持て囃され、正に流行の絶頂に達した時だ、中には神田、本郷の書生連の最貧せられ、風

雨に掃はず十五日を通ひとほす程の熱心は珍らしからず、中又には其後を追掛けて、神田から麹町、深川より四谷迄も奔走する連中もある。

女義太夫と堂摺連

◎實に淨世は様々なる、慥に一食に價する程の木戸錢を拋て、手拍子、悪袋め、聽客には厭はれ、出方には忌まれて居るのも知らずに自ら粋だとの通だとかと自稱して、獨り得々たる女義太夫のバヲルス……寄席の油蟲、堂摺連と稱けられたる一つの團体は、今や都下到る處の寄席に横行跋扈して、虚假の數々を盡して居る、さて此處に其眞相を書立てれば、先づ左の如き内幕さ。

◎第一が太夫の乘つて來た、其車の挽夫と口をきくのを無上の光榮と心得、終を待つ間を少さくなつて毛布に包括り、そして座敷の隅に轉がり居る車夫に、茶を覯め、菓子を買ひテモ機嫌とり〳〵「スケの席は割に入があるかえ……。

◎手拍子といふものこそ、沙汰の限りだ、自分では得意がつて居るであらうけれども、他から見れば餘り好きものにあらずさ、中には拍子を打ち損なつて四方を見廻し、首をすぼめるのがある、其可笑しさ、いやはや殆で狂氣の沙汰だ。

◎芝居なら總見物といふ處だが、此方では總傍聽その總傍聽こそ滑稽の滑稽、實以て可笑しい話である、何がしの付合とか、くれがしの義理であるとかと、毎夜のやうに下谷くんだりから深川の果て迄飛び廻り、席毎にて幹事と澄すもの好き家は、殆で中賣の眞似して菓子を勧め、茶を配り、蒲團、火鉢の世話迄取なし、わい〳〵騒い

だ揚句に、樂屋へ入るは鮨がたつた五十錢一皿、されば木戸、中賣等へは無論付届の渡る筈がなく、通常の木戸並にて仕切るとは、これ堂摺連の眞相である、而していざ一同がお歸りとなるや、幹事先生は態ふ木戸迄送り出し、「今日は殊に遠方の處をわざ〳〵有難う御座ります」と言へば、客の方でも「イヤ御苦勞樣で御座りました」、そこで斯く此等の連中が奔走盡力するのはどういふ譯かと探して見ると、笑止〳〵、「あの人は能く働いて呉れた」と御褒め辭の一つも頂戴したい許りであるのだ。

◎今に始めぬ事ではあるが、堂摺連の老狸の狡猾なる、附金もない唯つた一枚のビラに、ズラリと盛り返へる程の名前を書並べ、それを楯に太夫に强ひ、どうか斯ふか頭數だけの手拭を貰ひ取け、而してそれを新米の堂摺連に賣付ける、然も其價が拾錢乃至貳拾錢、處

で是を得た古狸連は、「これで今晩又寄席へ往けるは」と意氣得々さうかと思へば他人から無理とセビッて貰つた手拭と、山も潰れて擬襦珍に醉ぱらつたのと、名刺ばかりを入れた古紙入それをば出さずとも好い所へ迄ちやら〳〵と出して見せ、爪彈さされるをもしらずに、「彼的が〳〵」此名刺も、日を經るまゝに、涎と手垢で汚れて、穢なくなれば、さも〳〵大切さうに洗濯して糊を付け、火熨斗を當て其遣り振り、澄した顏して「又彼的から貰つた〳〵」、嗚呼唯た一枚の名刺、表に刷する處の文字は竹本何々、百枚あつて五十錢が關の山こんなものが大切とは、堂摺連のでれ助輩いやはや粹とか通とか口に唱へての半狂沙汰は、どんと呆れて物がいはれん、是でも銘〳〵喜んでるの乎、さりとは……さりとは、!!

◎これも席割の内の何厘かになるのかと思へば、流石に弱い商買の

さう強顏くも待遇されで、たまには送りもの〳〵禮に、世辭の二つ三つも言へば、それこそ〳〵、彼女俺に……など〳〵獨極めして、毎晩樂屋へ入りびたり、其上大口叩いて客人面、その小憎しい事、そこで若し「警察が八釜しう御座いますからどうか樂屋へは……」など〳〵、正直な事言ふものでもあらば、「畜生ッ、ナニを失敬な、女め、歸りに車を引くりかへすぞー、

◎それが恐さに二三度樂屋で口を利けば其次は忽ち住宅へ進擊し來り、何の遠慮もあらくれ書生の、此方へとも言はぬ先に、長火鉢の向へ胡座をかいて、仕方なしに酌で出すお茶をガブ〳〵「あの茶棚にあるお菓子は甘味さうだね……。

そのズウ〳〵しさ、面憎さ、斯んな連中が團体を組んで女義太夫の後を追ひ廻すのだから、實にたまつたものではないのさ。

娘義太夫の素顏と高座

現時の娘義太夫の實況を素葉拔けばこんなものさ

午後四時

「あゝあゝアー」と色氣なき大欠申をして四邊を見やり「今日は何うしたんだろう、否にお腹が空て來たよ。ちよつと小糸や、お前通り迄行つて餅菓子でも買つて來てお呉れな、さうね金鍔と鹿の子が宜いよ、澤山は入らないから八錢ばかり、りの序に南京豆を少しとね鹽煎餅を、何に、なぜさ、だつて、お前りの位喰べなければ、喰べた樣じやあないもの、さあお錢、をや贅澤だよ、さう〳〵毎日の事だもの、お鮨なんと續くもんかね、だけどもさ、何が美味しいつて寄席から歸りがけ、丁度十一時頃にね、あのろら過般喰べた、餡頓ね、忘れられないね美味くつてさ、否だよお前、誰にさ、そんな事

話す奴があるものかね、それにね私達あ兎も角も所うして皆さんに御負扇を受ける軀なんだから、色消し話や、愛嬌の無い事は大禁物彼の位に人氣を受けた淺之助さんを御覽な、小兒が出來たなんて、新聞に出されたもんだから、小石川のなんざあ到々手を引いちまつた、書く新聞屋も面が憎いが、出される身も因果だね、わ、夫りやさうと早く行て來ないかよ、何だか口ざむしくつて……お前にも少しあ上らあね。

五時

「いろ〳〵都合有之牛込の方はお前さまに撥六さんと、ぴん左衛門さんは、今晩より糀町の方へお出下され候やうに願度と存候人を馬鹿にしてるよ、私承知しないから宜い何だ今時分になつて、あの寄席も尻腰がないが、五厘の禿爺も人が惡るい眞似をしやがるよ、妾や初めてだよ、ビラ迄配つて置て、こんな目に遭はせられるのは、加之に外の人にやあ一圓から二圓餘の德のつく樣にしといて私しや何時でも三圓位い少ない方ゐ廻されるものだもの、何程藝人だからつて、自分の娘も一と頃は柳流で高座へ出た事もあるのぢあないか、今こそ八丁堀で壇那ぢりをして居るから、知らない顏をする樣なものゝ、あんな憎らしい奴も無いもんだ、宜いや、もう是から一切山の手へは出やしないから、それも自分で來て話でもする事が、手紙だあ何んて物を知らない奴だらう、眞個に不都合な禿頭野郎だよッ、

六時

阿母さん羽織を出してくんな、今夜かへ、えつと、今夜は酒屋（三勝）と、やなぎ（三十三間堂）と御殿（仙台萩）さ、包帛はその淺黃の方

がいゝよ、藤助さんは來たかね、(藤助とは夜だけ寄席へ行くに賴む人力車夫なり)あの八には勘定やつてお呉れか、まだい、澤山でもないからお遣りよ、上圓か八圓で彼是云はれちや顏にかゝらあね、それにお座敷が時〻あるんだからね、時々は御機嫌をとつて置かないと直ぐに聞て呉れないんさ、でもあの人はお酒は飲むが、小民さん所の源さん見たいに花なんか引かないから、まだ〳〵始末がいゝよ、それに那の人の癖だよ、毛布は質に入れるし、股引や法被は賣てしまふし、始末の惡い人さねへ、おや藤助さん御苦勞さま、今噂をしていたの、嘸ぞ嘘が出たらうと思つてさ、おほ〳〵〳〵ぢやあ直ぐに、はあ支度は宜いの今夜ッから鍋町へ先へ廻つて下さいないろ〳〵妙な順になりましたからね、ぢや阿母さん行つて來るよ、不在を氣をつけて、一時間ばかりたつたら小糸を先方へ廻して下さ

いよ、那奴も間抜だから能く吩咐けてね、おや〳〵否なお天氣になつたこと、さうねへ降らなけりや宜いことよッ、

七時八時

乘り附けたる樂屋の中には何時もの口上聞へたり、

「東西〳〵此もとお聞に達しまする淨瑠璃外題、太閤記十段目、相勤めまするは竹本仙吉、三味線鶴澤糸吉、まづは此所尼が崎初まり其爲め口上左樣ッ」

「仙ちやんの太十が、珍らしい事だね「と言ひ〳〵這入つて來る「皆さんお早ふ、はあ、思の外遲くなつたの、私は此次ですね、あゝ宜かつたもう、後れたかと思つて、え、爾うなの、中橋を濟まして來たんですよ、今夜は酒屋ですわ、おほゝゝ否だわ、見台へつかまつて、首を否に振るんだもの、眞個さ張子の虎見たいだわ」火桶の側

へずつと寄り「だが喜蝶さんは語りつぷりが巧いねえ、私感心した
の、その變り、又男にかけても達者ね、那的ぢやあなんの事はない
地獄だわ、それで何んて言ふとお金を取る算段ばつかりしてさ、だ
から此頃はお顏の色が惡いわ、青うくなつて、れに痩ぜたわね、」
「そら一と頃判事の息子さんで、えゝつと……何んとか言つた
人ね、否な奴だつたね、那の人が雪子さんに首丈けさ、何んでも彼
是二三百圓つかつたつてさ、何處が好いんだらう那んな女が、だが
お金を遣ふのは書生さんに、限るね、それにお世話が營けなくつて
宜いわ、その代り野暮な處もあるけれど、近頃金太夫さんは那の旦
那さんと分れたつて、眞個、へえゝッ詐僞みして捕つた、おゝ怖い
こと、ぢやあお金に困つてゞすね、如何なこつても惜けないね、
彼んな女に迷つてさ、其處へ行つちやあ、御同樣に、標致が宜いの

のは氣樂さ、おほゝゝ、賴んだつて噪ぐ人は無いんだもの、」
「はい」と後を振向き、「何あたしへお遣ひもの、又鮨ですかへ、おす
しも宜いが聲が嗄れてね、おほゝゝゝ、貰つて置て虫がいゝわね、
皆さん召上れな、私しや澤山、お腹が一ぱいですもの、え、あれ今
日の新聞に、重箱さんが出されたの、重箱さんと、あゝ玉枝さんの
事おぼゝゝ、誰と私通たの、否だねえ下足番なんぞ、爾う聞けば、
私も變だとは思つてたの、呆れ返るよ上げ汐の鰒がさ、うれぢや又
當分人氣が落ちますね怖いことゝ、あの今夜成瀨太夫さんは、お
座敷へさう……」
「はい宜ざんす、」
高座へ上りて見臺を据へ、風手をつくりて湯呑のお湯を一杯呑み、
「どうぞ願ひます」

會釋と同時に口上ぶれ、間もなく御簾もさり〳〵と卷上つて、棹之助是より一場の大氣焔、語らぬ先からヨウ〳〵などの聲賑はし。

九時

棹之助は盞氣に俯向き前に四十格好の男坐りね、

「そりやあ貴郎……否ですねえ、此んな私どもの樣な者を、お思召は有難う御座りますが、いゝえ、決して嫌ふのなんて、そんな氣はさら〳〵御座りませんの、ですが阿母さんが嚴しいもんですから、……それに藝が未だ未熟ですし、まだ根つから御贔負も無いので……あれッ……御立腹なの困りますねへ、貴郎だつて私風情に……そんな御戯談を被仰らないだつて……嘘ですよ、夫にやあ私も少し考へが御座いますから何れ……まあさ……能く、能うつくお聞き下さいましよ、そりやあもう、其うい

いふ御思召を伺ひますれば、どれほど嬉しいか知れませんの……何しろ御承知の通り、此痩腕で阿母はじめ立過しにしてるんですもの、どうか何れお世話樣にならなけれあ、何時迄も斯れで續くものじやあ御座いませんのさ……折角被仰つて下さるんだから……（と少し考へる外見）私だつて……（應ずる如く、應せざるが如く、男をして懊惱煩悶に堪へざらしむされど腹の中を割つて見れば、へん人を馬鹿にしてるよと計り、故意と強ねる處、世なれたる曲者ならでは、出來ぬ業となり）

十時

「宗ちやん、私もう〳〵大變な心配が出來つちまつたよ、何うしたら宜からう」。「何がよ」。「世話あする人があるのさ」。「へン面白くもねい、世話になんねえな」。「あれさお前も邪見だね、今更人の世話

になる位なら、お前とこうして、いろんな相談もしやあしないやあね」。「ウフ……宜い面の皮だ、こう冗談は置て、借金の方をばつけねへ事にやあ、どう思へつても仕様がねへせ」。「さうねへ」と是も塞ぐ、

（見來れば是が平素澄して居る棹之助が秘密にや、そも又性來の本色か、且那と仰ぐ人、最貧にする人、此場を覗かば果して如何）

これは即ち今の女義太が實況を鷄成子が穿つたもの、先づ〳〵こんなものであらう、

女義太夫寸評　附其絃

●素雪　女義太夫中での別嬪、何となく藝が淋しいので、語つては餘りに喝采が好くはないが、然し絃が割合に巧いには感心、可憐さうに、あつたら眉に疵がある、あれは小供の時、基場で遊んで居つて、つい轉んだ拍子に打つて出來た疵だが、それがあの通り今に殘つて居るのだ。……大熱々の情人といつたら……雀三郎さ、

●團昇　ほんとに可憐さうのは此團昇だ、賴みに思ふ團之助には死なれ、看板を下し、切前にックバッて仕舞た、藝は芝居がかつて居るが、兎に角老練のものさ、然し畳間は神樂坂ビーヤホールの女司令官だ、

●吉春　以前は大坂で口二三枚を語つた　太夫さんだ、それが親子三人で上京し、何うやら斯ふやら今では眞打と化け、臭い口で下手な義太夫を語り、而して耳の無い客を集め、獨り得意がつて居る處が罪のないことさ、あれでまあ宜いのよ、……近頃高麗屋に大焦れとの事だ、

●團光　啟でおまけに藪睨といふ、至つて御念の入つた別嬪？、子

淺ど名乘つて口語りの時分より、生意氣であつたが、今でも其生を猶永續して居る、そして掛聲で客を嚇かし、太夫はソッチ退けで、無暗と調子計り高くして彈立て、天下の三味線は妾獨りどは、イヤはや恐れ入つた化物、

素行　情は却々能く可なりに語るよ、就中喜内住家なんぞを語らしたならば、聽者の大半は正に泣く、然し絃の拙いのは言語同斷ホイ是は餘り口が惡る過た、

三吉　これは又弄花の名人、それが爲めに到頭腦病迄引起したが尙屈せずして熱心に研究中とは、此心掛で本職の藝に心を入れて貰いたいね、

綾太郎　何時も乍らだらくしした其本藝の義太夫より四つ竹踊が上手だとは、とんだ藝外の藝さ、

住之助　毎晩席へ出る傍、水菓子、塩餅煎の小賣をなし、其間に又信玄袋製造の内職をする、

竹本京子　堂摺連が騷いで語れやあしない、彼の人はあんな好い男の癖になぜあんなに騷ぐんだらうね、手拍子さへ打たなければ惚れてやるんだけれど」……とは成程好い御心掛だ、

小政　晝は肩衣の製造をする、但し御亭金兵衛殿の手助けに、

新千歳　「妾は本當におかめですね」と鏡を投ずる處愛嬌のある處さ、

大吉　三度高座へ卒倒し聲枯れ血涸れて猶技藝に熱中する、献身的女義大といへば、先づ大吉の外にはあるまいな、

若之助　梅駒の絃になつてから頗る非常な上達、前途有望、願はくは奮勵一番せよだ、それに富本をよくやる、本職の義太夫よりは正

に上手だ、

小豊後　ハイカラ役者の森操の舌たるい所が命だと、屯んだ處へ理屈を附け生血を反對に吸はれて居るさうだ、りのせいか丸い顔が少し長くなつたやうに見へるわい、

友之助越子　京子等と共に大平洋で淫賣婦なりと揚言され、其上寫眞迄添へられたので、大に恐り出し、擧句の果が博文館の編輯局へ決闘狀をば差向けたといふ事だが、鰍蛇にならずばよいが、友之助が國見山に惚れてるといふのも久しいものだが、千代子の一件を聞いてからも少しも怯む色がない、此分では來る五月場所が見ものだ、

小清　「世間では妾の事を、天狗だの傲慢だのと、種〻風説をするさうですが、ナーニ貴君、此通りざつくばらんの女ですから、どー

か其お積で、」とは彼が言振り、成程さうであらふ、彼の大坂は北の新地で藝妓をして居つた時、仲間の藝妓等が俳優買をするのをうらやましがり、何時しか見やう見眞似で、親父の弟子の鶴澤叶といふ年も親子程違ふ爺に迷ひ、一時はとんだお伴長衛門的の痴態を迄演じた流の果だもの、その位の事は正に理の當然、仕方がない代物さ、惡口は惡口として置て、こんどは彼が技の眞價を評して見やう、彼が席に上るや、垂簾が徐ろに捲上げられるが早いか、滿場の聽客は拍手の裡に彼を迎へるを常とする、處で此拍手が他のヘボ連を迎へる時の喝采方と其趣を異にして居る、尤も是は實見せらるれば直に解る話であるが、而して其拍手の中には多少の尊敬と、充分なる熱心の色を含まれて居る、是は最貧連の目から見た買被りでない、實に此一點が小清の殊に他の滔々者流と異る處だ、世の娘義太と稱

する連の多くは、或は節律の上に於て、若しくは化物然たる化粧の上に於て、一意專心聽客の勸を迎へんとのみ力めて居る、されば是等の輩は、時に或は過分なる賞贊と聲價とを博する事がなきにしもあらばだが、是は聽客が口先又は指頭のみの賞贊で、肺腑から出でた眞の歎賞たる言行を恭ふするが如き事は只の一度も絶へて無いのである、否なそを博する程の技量が全然ないからである、畢竟するに是といふのも小清が語振りは飽まで愼重に、而して嚴直に、凛然として其藝術を重んじ、更に衆俗を眼中に置かないからで、之を換言すれば、即ち丈は一意我技を暢演して聽客之に感歎し、他輩は聽衆の氣をのみ窺ふて以て其技を演ずるのである、されば既に其根原を異にして座に上るので、而して平素子弟に對しても嚴正で且つ勤肅であるさうだ、此后とても此方針で遣つ行つて貰いたいもので、賊に以て結構至極の次第、他に則つて以て模範と爲すべき價値があるであらふと信ずる、斯く論じ來ると吾人は小清最負論者であると言ふであらふが、是は單に小清其者が演藝上に就て、又は其眞面目に對して言ふのである、さらば其世間一般に對する彼が態度と聲値は如何であらふか、前にも一言書いて見た通り又自身も人に語つた如く、世間では天狗だと言ひ、自分は磊落だと稱して居る、扨其批判は暫く措て、元來娘義太夫なんぞといふものは至つて弱い商賣ではあるが、兎も角演藝中こそ剛直で、嚴正でなくてはならん、然し其平素に於てはさう許りでは到底も今日は遣つて行かれまいと、言つて媚びよ諛へよとは言はんが、唯傲慢に趨らん樣にして貰いたいものである、新聞記者を追返したとの、又は雜誌に肖像を出さないのを以て誇つて居る樣な事は餘り褒めた話ではない、何を言つても藝

人だ、人氣を取るが第一番、よく〳〵身の程を考へねば可宜あるまいてな、

愛子　「福之助は彼の醜い顔へ、コテ〳〵白粉を塗るよ」とは彼が惡口、其癖御當人の內幕はどうだ……筆序に書立て、見ようかね、

廣竹　女義太夫中第一の亭主孝行だ、尤も自分よりは十歲程の年若、

素秋　神田同朋町の一進堂といふ活版屋の娘、晝は自宅に文撰を爲し、夜は席へ出で義太夫を語る、近頃延次郎に大熱々との事だが延次郎には外に好いのが附いて居るからな……ハハ、

昇之助　豪い人氣とは此昇之助の事、若竹へ掛かる時は每晚ん必ず千四五百の客は取るが、席亭は例の源四郎（客劃の頭數をば刎ね

て取ること）で八百ぐらいしか樂屋へ入れないより、其荒つぽい刎ね方に怒り、三日目より到頭席へ出るのを斷つたので流石の若竹も閉口して託を入れて事濟になつたとは、實に大出來々々、是が今年十三歲の娘子とは、堂々たる六尺の男子は愧かしい話だ、

昇之助の來歷　昇之助の好評は前に記した故、今茲に其來歷を介しやう、彼は本名を貴谷ヨネといひ、明治二十三年十一月八日を以て大阪市西區靭上通り、二丁目に生れ、同地の席亭靭館の主人貴谷菊次郎の次女である、幼にして英利、年甫めて八歲の時、先代豐竹時太夫に從ひ「日吉の三」を手解された、それから後、「鏡山」と「御所櫻三」を習得して、次は鶴澤友吉に就き「鳴門」又野澤吉彌に從つて「太十」を、竹本勢見太夫に「菅原傳授の四」を、鶴澤三平に就て「合邦」を、住太夫に「紙治」を、伊達太夫に就て「時雨の炉燵」を、又大阪

の素人義太夫の大斗義調に就て「壺坂」を、春子太夫に就て「吉田屋」を、豊澤猿糸に就て「仙臺萩」と「三十三間堂」を習得した、是からして春靭館に呂升の切三として席に出で、「由良の湊」を語つた、是れ實に明治三十年の春で、即ち昇之助が始めての語物であつた、此時から續いて本年七月迄同館居附き、大に全市の喝采を得たが、其後京都より神戸、和歌山等を歴て、遂に本年九月十五日より茅場町の宮松からして看板を揚げ、以て東都の義太夫界に打つて出でたのである、今ろの語り口を見るに、否や聞くに、狂熱あつて曲中語る處の個々人物が性格を寫し出し、元に加ふるに、彼が天性なる、愛らしき美聲は、最も聽衆をして感歎賛賞を能はざらしむるの、眞値を有して居る、而して一方にありては其技藝に熱心なる、平素毎夜早ぐも進んで樂屋入をなし、そして小政、素行等、斯道先輩の語り口を專心に謹聽し、自分の高座に上る前には必ず其夜語るべきものゝ先習をする、それに彼の技に赤誠なる、先頃四谷の「喜よし」で「重の井子別れ」を語つて居つた折、俄然激しく地辰があつたので、滿場の聽客は膽を潰し、皆總立ちとなて、騒いだのに、昇之助は少しも動かず泰然自若として語つて居つたのには、何人も感服しないものはなかつた、嗚呼昇之助年齒漸く二六、而して其の名聲を博する將に東都の娘義太夫界をして顔色なからしめんとする程である、願くは昇之助よ、幸に自重自愛して其多望なる前途を誤ざるゝことなく天晴昇之助の昇之助たる眞値を輝かせたまへ、

竹本東猿　十人十色の浮世とはいへ、何人も櫻の艶麗なるのには狂するけれども、嚴冬雪を凌ぐ常盤の松の緑を賞するものは少ない誰れも等しく忘れ勝となるは自然の然らしむる所である、されば京

子の艶名喧すしきに似ず、東猿の名の案外に聞へないのも、強ち無理ではない、今の聽衆の多くは娘義太の顔を見に行く連中のみ多くして、眞に藝の如何を聞分ける程の人は尠はいのである、東猿の身になつたならばこれ程情ない事はないのであらう、而して彼が氣骨の愛すべきは、自分の不無理は押へても、他の無理は通してやらうといふ江戸ッ子肌の氣象なので、抑も此氣象なるやと論じ出すと少し難かしくなる故先づ措くとして、其儀の確かなる、從容として迫らず、騷がず、じり〳〵つと語り込んで進む巧妙の外に彼は又義太夫の生命たる情を美事に語るのである、加ふるに其格調も頗る嚴正で、彈絃も可なり遺れるのであるから、恰ど虎の翼が有るも等しく、殆んど間然する處がない、然し乍ら强て此丈の欠點を求めたならば、高座の上に於て稍々品位の乏しい事でがなあらふ

竹本組幸

去る拾月一日より宮松へ出席した大阪上の組幸は、素と大阪で三子といつて千日前の幡重に出で居つた、「此幡重といふ席亭は大坂で女義太夫の寄席中第一のものである」此組幸は喉や音聲の工合で恰ど綾之助に似て、而してもつて一層義太夫聲である、それ故今の若手の中では先づ有望な方であらふ、そこで其語り口を評して見れば、女義界の麒麟兒を以て目せられてをる彼の事とて、年齒漸く十六歳の少女ではあるが、その宛然玉を轉がすが如き嬌喉に滿場の聽衆をして覺へず肅然として形を正さしめ、實にいふに言はれぬ、妙味がある、彼の語り振りは昇之助の樣な愛嬌の無い代りに又渠が樣なケレンを弄さない、極めて沈着に、そして極めて眞面目に、彼が腕一杯に語りこなす工合格搆、その容姿ころ少し二の町の方なれ、藝は確かに滿都のセコ眞打をして、後へに瞠若たらしむる

の價値は充分に認められるのである

梅登　此丈は豪いもので、法律から民事も來い、刑法も來い、國際法も御座れといふ大先生、穗積や鳩山は洗足といふ評判、尤も之な御當人の氣焰だが、先づ其言ふ所を聞くに、「妾に一人の良人あり と假定せよ、その良人若し他に情婦を作り、妾を離婚せんとす、是明かに妾の既得權を侵害せしなり、是を法衙に訴ふ、果して受理すべきや否や」萬事が總て斯んな寸方の法律通である

網辰　組幸が隨行員の一人として上京したので、無論巧からう筈はないのさ、彼が先日語つた壺坂なんぞと來たなら、殆で詞に雌雄の區別がなく、お里も澤市とが交る〳〵盲目になるとは、扨て〳〵心細い語り口である

三子　是でも一度は看板を揚げて居つたかと思ふと、其厚顏に吾人は驚かざるを得ない、恰も昇之助に於ける吉春と好一對で、而して是は更に彼れよりも拙く、語る所一として殆んど物になつて居ない、（少しひど過るかな）精々三の口位の價値しか見受られない、然し切りの組幸を引立てるために、故意とこんなのを切前に撰び出てだとすると、唯々御苦勞といふより外はないのさ

竹本住助　語り口は先づ置て、其心懸が感心なものさ、「妾は廿五迄男の肌を觸ないの、夫から二十五迄に看板を揚げられなけりやあ自害して死んで了ふよ」とは彼の氣焰、勉めよ住助、此心がけで精出せば名を揚げるのは請合だ

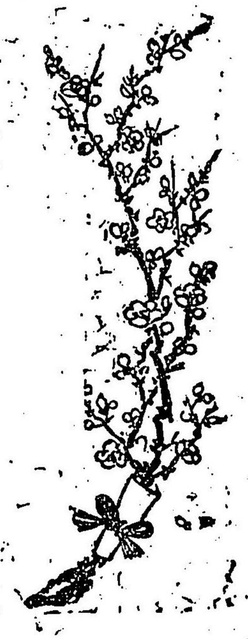
峰子　前に書いた網辰は御話にならず、組幸も大に愼重の態度を取つて居るやうだが、此子許りは臆面もなく語つて、首許り振つている所は、殆ど人形芝居の仕出しのやうだ、僅か十二か十三の少女

で兎も斯くも人を喰つてる所が豪いものだ、何んでもあどけない此時代に修養するのが肝腎だ、もう少し色氣附いて來ては駄目である今が眞に勉强の仕所だ

梅路　堂摺連の中で、此丈を口説いてズドンを極められた者が十三人、惚れられた者は無慮四十と有八人、そして成功たものは誰だの一人もなしと、堂摺連の前途又心細しとはいへ、流石梅路の外硬政策は巧いものだて

綾重　たゝ見れは何の苦もなき水鳥の足にひまなき俄思かな、とは實際だ、綾重も小野一件では隨分諸新聞で手酷く攻擊されたが、或る時客に其事實の有無を質問されたら、彼れ平然として質屋の通帳を客に示し、「千圓から絞つた妾は此通り質への出し入れをして居ます」と言はれたので、御客先生も驚いて遁げ歸つといふ話だ、今

の女義太、連の內幕を搜つて見ればまづ〳〵斯んなものである。



講談界

松林伯圓

木挽町の大先生

講談界の泰斗、「年は老つても藝に雛は寄せない」と、相變らず氣燄萬丈、虹の如くである、茲界に於て木挽町の大先生といへば、直に伯圓であると極つて居るとは、扨てもく豪い勢力かな、一体伯圓は先代伊東潮花に最初から讀物を仕込まれたのであるから、實に演じ振りが確乎として居る、うして其土台を戰爭もの即修羅場で仕上げたのであるから無理はない、うれから御得意物といふたら曾我物語で、義士傳も天狗小僧も、斬られ與三郎もやる、而して又俠客傳と

來たなら伯圓の最も得意な處で、舊幕時代の俠客傳で八分通りは此人の著述になつて居る位だ、其高座に於ての意氣込みと來たら全く平常家に居つて、猫が十二疋、犬を二匹を相手に遊んで居る、老爺とは思はれん位だ、

邑井一

嗜好と呼吸

方今講談師社界で隨一の名家、伊東燕尾茲界を退いて後は、松林伯圓と共に、東西の雄鎭を以て稱せられて居る、然も身を投じてより以來四十年、講談界又其右に出る者なりとはちと大法螺だが、先づく上手の方だ、得意の讀物といふたら、義士銘々傳に煙草屋喜八奥州二本松の仇討なんぞである、それに俳諧が好きで、號を籟庵一と言つて居る、先頃迄藝名を邑井貞吉と稱してたが、悴に貞吉の名を

譲つて自分は俳號の一を以て藝名とした、そこで彼が得意の句といふのは、

立かけたやうに落るや春の瀧
鯉賣の水かえて行く柳かな

それに又浮瑠璃が大の好きで、匆々能く唸る、其内でも逆櫓、壺坂寺なんぞが大天狗だ、凡そ人情講談をやるのには、此浮瑠璃の呼吸で往かぬばなりませんとは此人の意見である、

神田伯山

一甞二圓の味噌

或時伯山が仲間の邑井吉瓶(今の操)や故人になつた旭堂南慶なんぞと共に、吉原の寶來樓にて遊興し、翌朝大門を立出でた時、道の傍に一人の煮豆屋が荷を下して、其處邊へ商法に赴いた容子に物數寄の伯山ツカ〳〵と荷の傍へ進み寄り、甞味噌桶の蓋を取つたから兩人は何をしてるのかと見て居る中に、伯山は一と甞めなめて、「旨い〳〵、此奴は乙だ、兄弟一甞め遣つて見な」と舌打鳴らして居る處へ、ヒヨックリ豆屋が歸り來り、此体を見るより大に立腹し、伯山を捕へて大に其不都合を詰つたので、伯山一言の申譯もなく、大に閉口の体であつたのを漸く兩人が仲へ這入つて豆屋を宥めたが、頑として應せず、此營業物を惡戯されては最早賣物にならんから、一桶ソックリ買つて呉れろと附込まれ、遂に味噌の代金一圓と、桶代一圓とイて二圓を支拂ひ、一桶の味噌を抱へて立歸り、二天門の席で仲間の者に分けて與へた、一と甞二圓とは隨分高い味噌だ、

松林伯知と右圓

景物附競爭の講談

松林伯知と、右圓が未だ伯養と稱して、兩人共に看板を揚げなかつた頃の事であるが、隔日の眞打にて、神田五軒町の日本亭へ出席し景物に反物其外種〻の品物を出した處が、何がさて慾の世の中との講談は兎も角、景物が目的の連中は、運よく太物の一反にも有附て冬の寒さ凌ぎでもしやうとの慾張心から、薄暮より犇々と詰めかけ毎晩〳〵大入客留といふ好景氣であつた、然るに伯知と伯養の兩人が不圖した事から爭を起し互に看板を引かんと迄騒いだのを、席亭の主人が仲に入りて漸く和解となる譯にはなつたが、二人の心の中は匆々に解けないので、兎角面白くなかつたが、伯知は同仲間で大江廣元と綽名される程の人物とて、忽ち一計を考へ出し、伯養が眞打の日は、已れ中入前に出席して、一席讀み終るや、景物をば〻〻〳〵出して積み上げ、一々其籤に合して客に與へたものであるから、

ら、元來景物にのみ目的を附けて遣つて來た、御客等は景物さへ貰つて了へば用はなしと、其儘ドシ〳〵ゾロ〳〵と立歸り、後座の伯養が講談を聞く者は、殆んど皆無の姿とたつたので、伯養も之には大に閉口したが、伯知は己の眞打の日は出方、席の者等に鼻藥を與へ、自分の高座が終りて打出しの際に、景物を出すやうにしたもんである故、一人として中途から立歸る者はなかつた、それから後春風秋雨茲に幾年、大養は右圓と改名して大板看の眞打となり、明春ならば師匠の名跡を續で伯圓となるべく、伯知も亦屈指の眞打に出世し現今は其社界の副頭取として其人望鬚と元に厚く、何れも多くの門弟を養成して、相互の親交愈〻密である、然し乍ら、以前は日本亭の景物講談とて一つ話に殘つく居つた位であつた、

小金井芦州の法螺